特10
76

002652-001-5

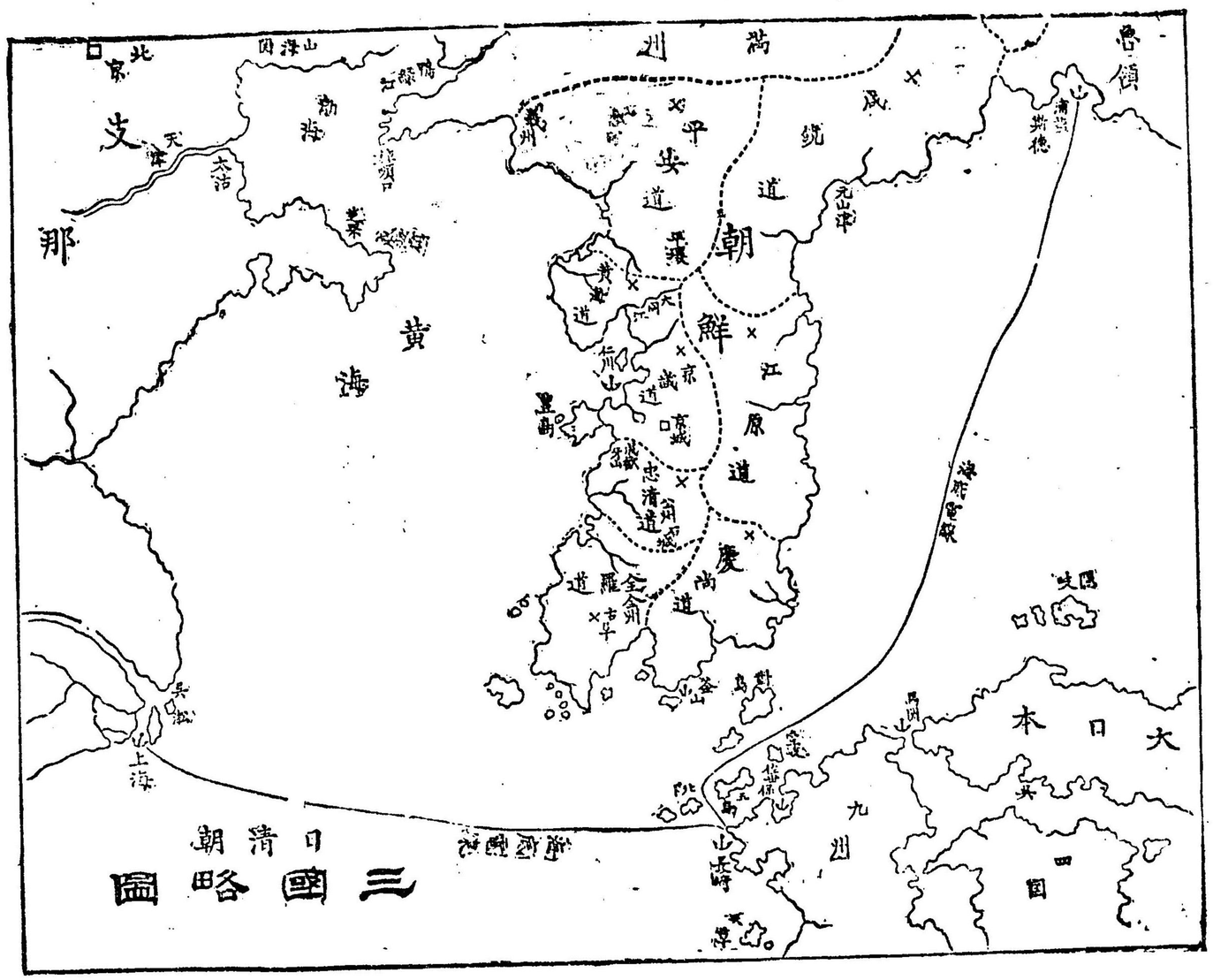
特10-76

日清戦闘実記（絵本）

三井　新治郎／編

M27, 28

ACB-6086


北京
山海關
滿洲
俄領
支那
天津
太沽
渤海
營口
奉天
平安道
咸鏡道
朝鮮
黃海道
江原道
慶尚道
全羅道
忠清道
京城
仁川
釜山
對馬島
大日本
九州
四國
上海
日清朝

三國略圖

宣戰詔勅

天佑ヲ保全シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國皇帝ハ忠實實武ナル汝有衆ニ示ス

朕茲ニ清國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ百僚有司ハ宜ク朕カ意ヲ體シ陸上ニ海面ニ清國ニ對シテ交戰ノ事ニ從ヒ以テ國家ノ目的ヲ達スルニ努力スヘシ

凡ソ國際法ニ基キテ認メラルル限リ各々權能ニ應シテ一切ノ手段ヲ盡スニ於テ必ス遺漏アラシムルヿヲ期セヨ

朕カ由來久シク東亞ニ於ケル恒久ノ平和ヲ保シ各國ノ權利ヲ尊重シ以テ列國ノ交誼ヲ厚クスルヿ不可ナルヿヲ信シ有司ヲシテ常ニ友邦ノ誼ヲ篤クスルニ努力セシメ幸ニ列國ノ交際ハ年ヲ逐フテ親密ヲ加フ何ソ料ラム清國ノ朝鮮事件ニ於ケル我ニ對シテ著々隣交ニ戾リ信義ヲ失スルノ擧ニ出ムトハ」朝鮮ハ帝國カ其ノ始ニ啓誘シテ列國ノ伍伴ニ就カシメタル獨立ノ一國タ

リ而シテ清國ハ每ニ自ラ朝鮮ヲ以テ屬邦ト稱シ陰ニ陽ニ其ノ內政ニ干涉シ其ノ內亂アルニ於テ口ヲ屬邦ノ拯難ニ籍キ兵ヲ朝鮮ニ出シタリ朕ハ明治十五年ノ條約ニ依リ兵ヲ出シテ變ニ備ヘシメ更ニ朝鮮ヲシテ禍亂ヲ永遠ニ免レ治安ヲ將來ニ保タシメ以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セムト欲シ先ツ清國ニ告クルニ協同事ニ從ハムコトヲ以テシタルニ清國ハ翻テ種々ノ辭柄ヲ設ケ之ヲ拒ミタリ帝國ハ是ニ於テ朝鮮ニ勸ムルニ其ノ秕政ヲ釐革シ內ハ治安ノ基ヲ堅クシ外ハ獨立國ノ權義ヲ全クセムコトヲ以テシタルニ朝鮮ハ既ニ之ヲ肯諾シタルモ清國ハ始終陰ニ居テ百方其ノ目的ヲ妨碍シ剩ヘ辭ヲ左右ニ托シ時機ヲ緩ニシ以テ其ノ水陸ノ兵備ヲ整ヘ一旦成ルヲ告ルヤ直ニ其ノ力ヲ以テ其ノ欲望ヲ達セムトシ更ニ大兵ヲ韓土ニ派シ我艦ヲ韓海ニ要擊シ殆ト亡狀ヲ極メタリ則チ清國ノ計圖タル明ニ朝鮮國治安ノ責ヲシテ歸スル所アラサラシメ帝國カ率先シテ之ヲ諸獨立國ノ列ニ伍セシメタル朝鮮ノ地位ハ之ヲ表示スルノ條約ト共ニ之ヲ蒙晦ニ付シ以テ帝國ノ權利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲシテ永ク擔保ナカラシムルニ存スルヤ疑フヘカラス熟々其ノ爲ス所ニ就テ深ク其ノ謀計ヲ存スル所ヲ揣ルニ實ニ始メヨリ平和ヲ犧牲トシテ其ノ非望ヲ遂ケムトスルモノト謂ハサルヘカラス事既ニ茲ニ至ル朕平和ト相終始シテ以テ帝國ノ光榮ヲ中外ニ宣揚スルニ專ナリト雖亦公ニ戰ヲ宣セサルヲ得サルナリ汝有衆ノ忠實勇武ニ倚賴シ速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝國ノ光榮ヲ全クセムコトヲ期ス

御名御璽

明治二十七年八月一日

内閣總理大臣　伯爵伊藤博文
逓信大臣　伯爵黑田清隆
海軍大臣　伯爵西郷從道
内務大臣　伯爵井上馨
陸軍大臣　伯爵大山巖
農商務大臣　子爵榎本武揚
外務大臣　陸奥宗光
大蔵大臣　渡邊國武
文部大臣　井上毅
司法大臣　芳川顯正

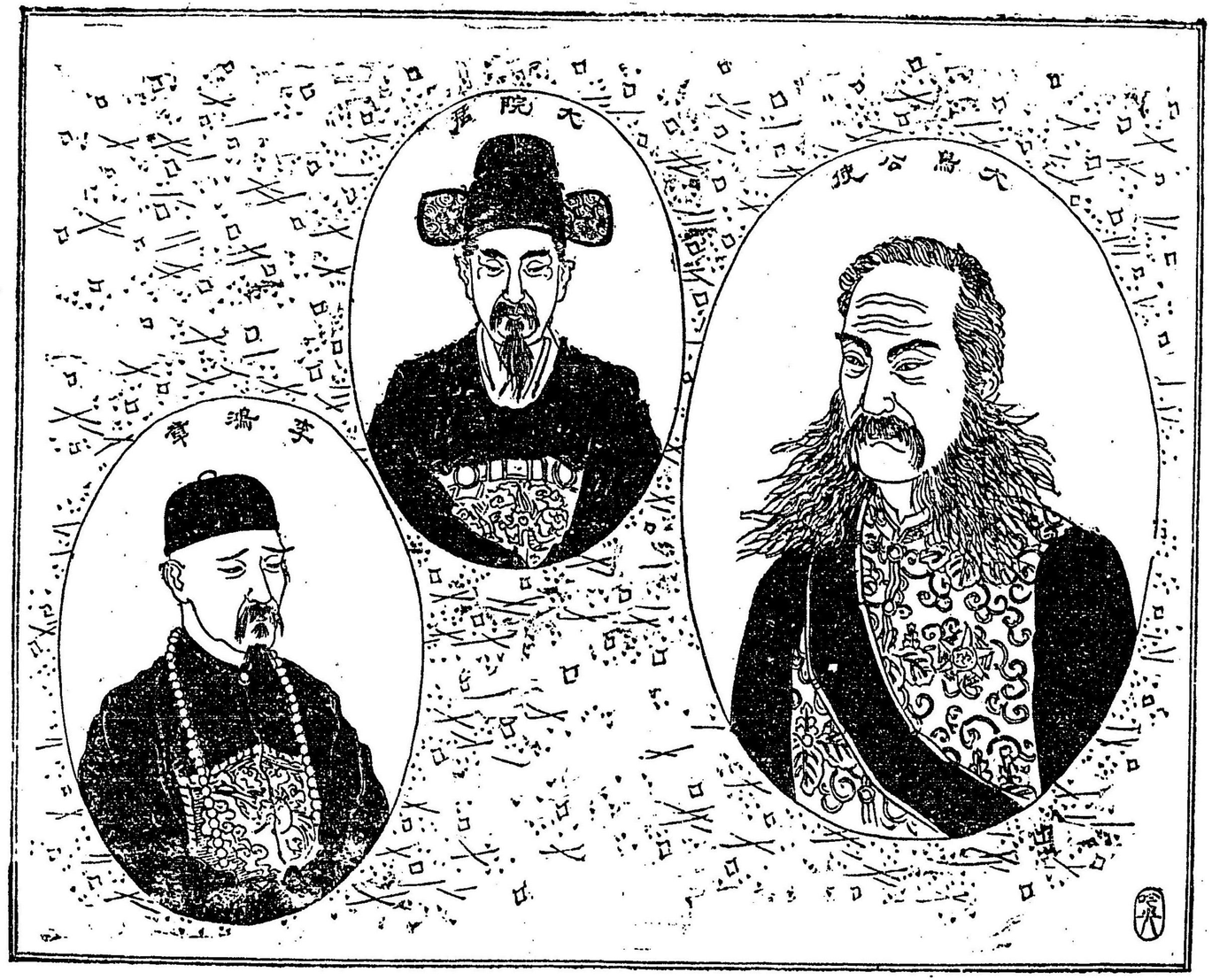
日清戰鬪實記自序

嘗時なる哉、時なる哉、今や日清の修交ゝ東學黨の導火ゝ由りて破裂せり、已むを得ずして開戰せり、實ゝ我が今回の擧ゝ大義名分の赫灼たる、俯仰天地の間ゝ恥ぢざるの美擧あり義戰あり、今や我が同胞ゝ、千里の波濤を隔て海陸山野の間ゝ轉戰し、露けき野營ゝ起臥して、以て具さゝ困苦を嘗む、然れども大義の爲めゝは、野營も金殿玉閣として之れゝ起臥す、鬼神も猶ほ其壯烈ゝ感ず、此時ゝ當りて、吾人本國在住の人民ゝ、彼地の形勢、一擧一動、皆々耳を傾けて之を聞かんと欲す、因て余當東學黨蜂起の顚末より、日清戰鬪の實況を敍述して、以て四千萬同胞ゝ頒つと云爾。

明治廿七年八月

鬼雄外史識

檜本


大院君
大鳥公使
李鴻章

絵本日清戦闘實記目錄

○第一回　東洋問題朝鮮國の内亂
遺恨十年東學黨の蜂起

○第二回　日清兩國の出師
朝鮮局面の一變

○第三回　日韓小戰大鳥公使の入城
弊政改革大院君の新内閣

○第四回　豐島海戰清兵潰廣乙二艦の敗走
操江號捕獲運送船悶然の沈沒

○第五回　安城成歡の激戰日軍の大勝利
牙山本據の陷落清兵の大潰走

特1 76

記

朝鮮内亂東學黨の蜂起

嗚呼、朝鮮半島國や、東洋の巴爾鉛なり、即ち東方亞細亞の咽和の關鍵なり、又日清露三國の均重勢を保つの緊鍵、堅く其緊節を保てば、則ち東洋の平和や朝鮮の關鍵、堅く其緊節を保てば、而かも半島の關鍵、若し其きよ居る可しと雖ども、則ち東洋禍亂の種子火口や、是れより導火を傳へて、以て破裂し、時天の霹靂、平地の波瀾、赫灼たる天日の輝げる東海の天地、赤ち砲煙硝霧よ蔽はれ、腥風血雨の慘狀、肉飛び骨立つの修羅場を現ずるに至る可し、實よ恐る可きや朝鮮の地勢あり

愛に朝鮮國東學黨の由來を按ずるに、素と是れ學問と宗教との故を以て團結せる一黨派にして、其主趣、東邦の儒教、孔孟の道德を主張し、外教耶蘇の徒を論難排擊するを目的として、以て結黨せるものあり、然るに人生の事、極めて不規不定にして、東學黨の主義、素と是れ儒教を奉じて、以て外教を排斥するに在るにも拘はらず、其黨類崔福成、偶々少しく在來の孔孟の教へと異なる所ありしに、政府の之を目して以て外教信者と爲して之を處刑す、該黨員の大に之を憤り、深く政府の所爲を怨み、終に政府に反抗するの意を現はす、是に於て乎、嚮きの學黨の一變して、以て一種政黨の姿と爲れり、既にして我が明治廿六年四月、將さに暴發せんとして、而して偶々(早く密謀露われ、事成らずして鎮定に歸せり、嗟乎一時の鎮定喜ぶ可き似たりと雖ども、而かも一旦既に內政腐敗して以て內亂を兆す如何ぞ其れ永く鎮靜を保つを得んや、早晩必ず何方にか向て、復た暴發する所あるべしあらざるあり。

東學黨の積怨重怨此の如し、既にして全羅道古阜の郡守趙秉甲なる者、昨秋該地方、非常の豐作ありしにも關せず、俄かに防穀令を布き、別に己れの親族をして夥多の米穀を買ひ、以て其奇利を博せしめ之れに加ふるに租米徵收の際、非常手段を以て、大に虐政を擅にす是に於て乎、東學黨俄かに東津の邊に暴發す、實に韓歷甲午正月十日、即ち我が明治廿七年二月十五日に當りける、人員初めは凡そ五百人前後にして、一擧して郡守の城を陷れしが、一たび東學黨暴發の報を聞き、遠近風を望んで蜂起す、其黨、全羅、忠淸、慶尙の三道に涉り、無慮五六萬の大衆に及び、其勢ひ猖獗にして殆んど當る可らざるものゝ如し、其首領は三人あり、曰く全明叔、曰く、鄭益瑞、曰く、金某即ち是れにて、其張旗を稱へせし

東學黨
蠭起して
地方の酷
吏を誅戮

主義は、聖訓道行、救世濟民、奸臣排除の三條目に在りて、其目的は、一に政府を顚覆し、政治を革新するに在り。

斯くて東學黨の勢ひ、益々猖獗にして、連戰連勝、愈々北進し、其策終に京城に迫らんとするに在り、去れば中央政府は之を聞て大に驚き、招討使を派して以て之れに當らしむ既にして官軍南進するや、東學黨は、靈光、咸平、務安の三城に引揚げ、相鼎立して、以て官軍に當る、此時しも別に仁川より派遣せる、官軍の一隊、江華兵、木浦に上陸し、東學黨の退路を遮り、前後より夾擊せんとの計りける、東學黨は早くも之を探知し、急に三城の兵を合して一隊となし長驅して羅州を越え、長城に陣立籠りける、抑も全羅道の長城と云へるは、山間の一小都會にして、頗ぶる險難の地勢なりし、官軍は益々進んで靈光に陣し、此に兵を二軍に分ち、一軍は二百人に、大砲二門を備へ高敞を經て進み又一軍は百五十人に、大

砲二門を隊へ、森溪を經て進み、就れも賊陣を目指して發程せり、實に我が明治廿七年五月廿七日の未明なり、既にして同日の夕景を以て長城城下に達す。

初め招討使は、兎角に兵數の不足を憂ひ、其未だ長城に到らざるの前、臨時に民兵を徵集せんと欲し、一の關文を發しけるに、或る一日、百五十人の民兵一隊、陣門に來りて、怒勢に其徵集に應じて馳せ參りたるの旨を陳じ其證として關文を示しければ、何の疑ふ所もなく、大に喜びて其義を賞し叮重に取扱ひ、直ちに之を隊中に編入せり既にして官軍長城の近傍月坪に到りけるに此に期なく官賊遭遇せり、招討使遙かに之を望むに、賊軍の數、總かに百名に過ぎざるものゝ如し、其間三四町、隔て塡然として之れに鼓うち砲戰銃聲の響を開きけるに戰鬪既に開くれば響きに小軍と見えたる賊軍は天よりや降りけん、將た地よりや湧きつ

東學黨
石城を
陷る

らん次第々々漸次に兵數を增し、殊に又左右に隱れたる伏兵、俄然一時に蹶起し、其兵數々千の多きに達し、其勢ひ破竹の如し官に是れのみならず、此時しも獨逸の召募の民兵百五十、其實は東學黨の廻者突然兵器を倒に、一聲の合圖と俱に、忽然二軍に分れて、官軍の後ろの方左右より夾擊しけるに、何かは以て堪る可き、終に大敗し、砲兵士官一名は擒にせられ、猶は大砲二門を奪はれ、其餘死傷者は、實に百數十人の多きに及べり、去れば東學黨は、詭計を以て、大に官軍を破り、其勝ちに乘じ、更らに進んで全州を去る三里の處に陣しける。

此時全州監營の兵は、皆な既に招討使に附して境外に在りて、全州市中復た幾兵を留めず、其驚愕亦想見す可し、續いて又招討兵の敗報到るに會す、市中上下の周章狼狽云へん方なく、皆な八方に逃走せり、此の全州監司は飛電以て、中央政府に急援を乞ふと

雖ども、事既に遲し、此時東學黨は、愈々進んで城下に迫り、吶喊の聲殆んど天地も崩れんばかりに揚げたりける、然るに監司は愈々危急の趣きを以て、京城に發電すと雖ども事愈々晚し、彼れ是れ數回の發電中、空虛なる全州は全く陷落して、以て東學黨の手中に入り歸したりける、實に我が六月一日なり全羅道の首府既に然り、故に全羅一道は、遂に全く東學黨の占領する所と爲れり、此の敗報一たび京城に達するや、中央政府の驚駭は、譬へんに物なく、日夜會議の際、偶々清國全權公使袁世凱の獻策を用ひ、清國に向て、賊徒鎭壓の援兵を請へるが、是れ實に東洋平和の關鍵を破るの基と後ちに知られける。

○第二回　日清出師朝鮮の局面を一變す

一波去りて一波來り、一瀾退いて一瀾進む、豈に啻に河海のみ然らんや、外交兵勢殆んど亦然り、東學黨の勢ひ、益々猖獗にして、既

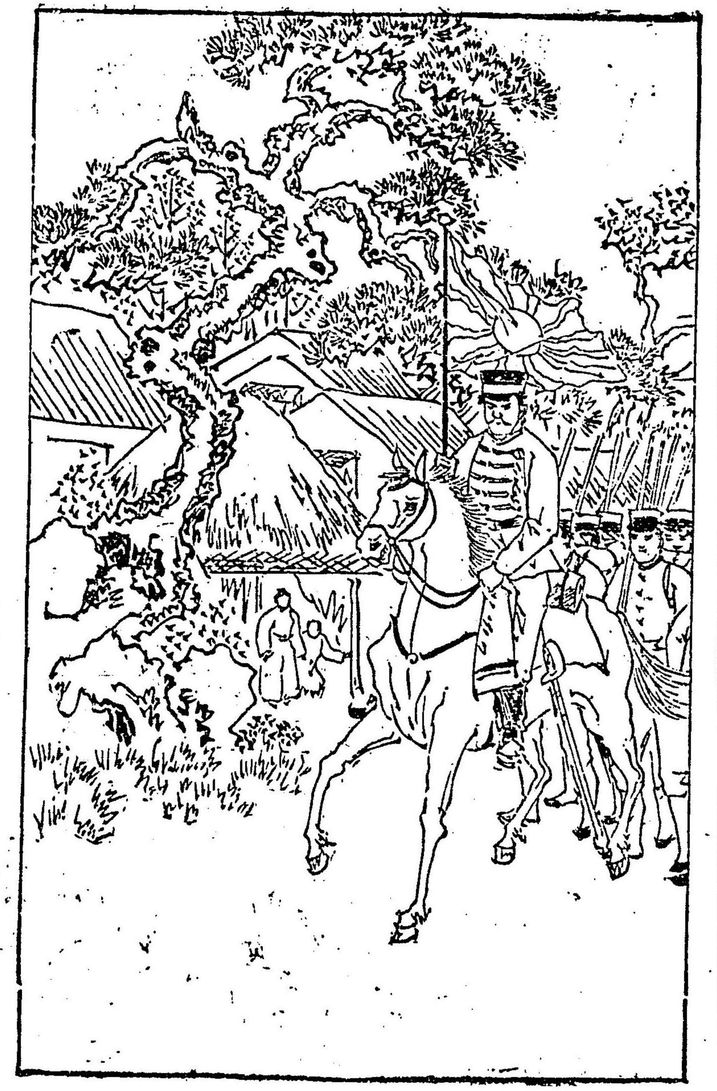
東學黨
官軍を
襲撃す

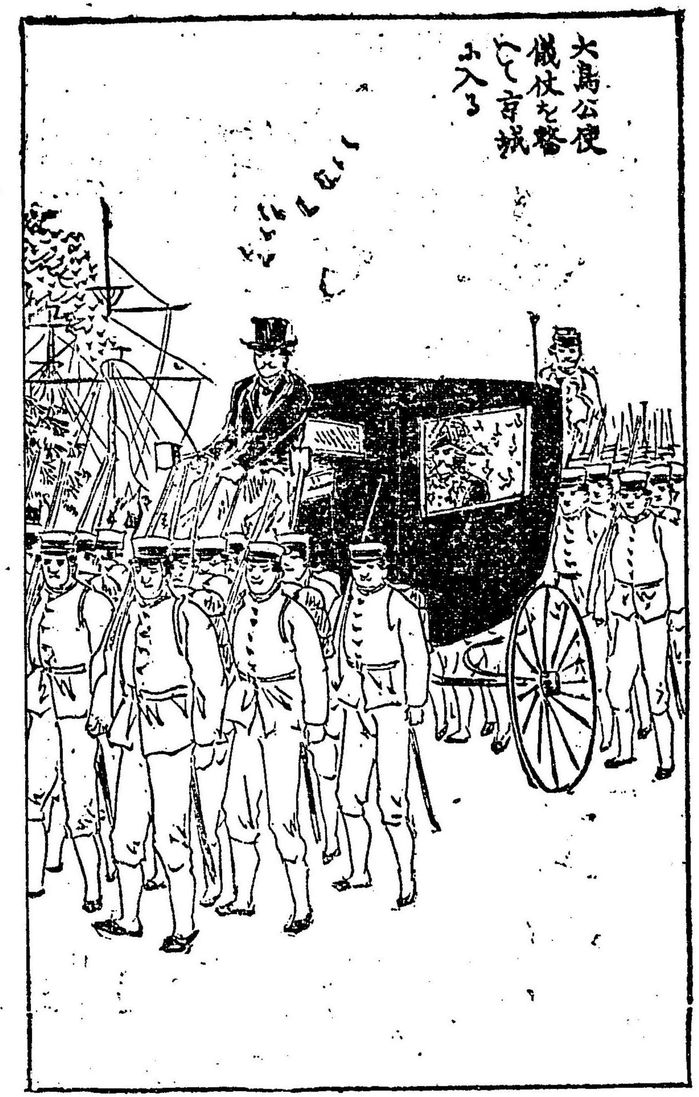
は全州を陷落するや、韓廷の之れが鎭定に苦み、清國に向て援兵を乞へるはそ、清國の多々益々大兵を朝鮮に派遣せるは、是れと同時に、我が日本も、亦公使及び人民保護の爲め、混成旅團の兵を派遣せられたり自ら防がんと欲して、兵數を增加するの、則ち他をして自ら禦がんと欲して、兵數を增加せざる可らしむるの近因として、又一轉して自ら更らに兵數を增加せざる可らざるに至らしむるの遠因となるとあり、是に於て彼れ一歩を增せば則ち我れ亦一軍を加へ、我れ既に一軍を加へれば、則ち彼れ又一兵を增し、此の如くにして日清兩國、多々益々出兵して、以て多島海、及び京畿、忠清、平安の諸道に充滿したれば、韓廷の大に驚愕し、斯く兩國より大兵入込みての如何ある樣事出來せんも測られず と憂苦煩悶安き心地ぞなかりける。

此時に當りて、東學黨の既に全州を陷落し、更らに進んで以て礪

山府に到りけるが、此方の招討兵、一先づ忠清道の公州監營に引退きて銃氣を發へ更らに京城より派遣せる平安の壯丁五百、及び其餘二百の兵と合し、其兵凡そ一千餘、兵氣燦んとして、殆んど將さに天を衝くに至りしかば、其銳鋒を以て、我が六月六日進んで全州に向ひ、此に戰端を開きけるが、翌七日再び戰ふに及んで、招討兵全勝を得て、遂に全州を回復するに至れり、是に於て東學黨の殘兵の、益々南方に退却せるが、此時に當りて、支那の兵既に到着して、忠清道牙山に據るとの報達するに至る、是に於て東學黨の意、或の暫らく其鋒を避けて、銳を養ひ以て他日の謀を爲さんとするに在る耶、此時よりして其黨の動靜聞えず、一時殆んど立消えの姿とぞなりにける。

嗚呼清兵の他に行軍するや、其兵制敢て之れに適ふの糧食を齎らすにあらず、去りとて又敢て我れに糧食おきも要ふるに足ら




大島公使
儀仗を整
して京城
に入る

ず、敵よ糧食ある間に、我れ之を奪ひて以て之を食すと云ふ勇氣あるよあらず、全く其行軍の途次に當る土人、及び其屯在地近傍の良民の食を掠奪して、以て之を其糧食の足として之を食するあり、故よ清兵屯在地、牙山の近傍の良民に、其强奪の慘狀を被る者、比々皆な然り、清兵の不規律よして、將校よ威嚴なきに、今更ら言ふまでもなく、若し冷語を以て之を言へば、實よ不規律に清兵の精神とも云ふ可きものよて、之れが爲めよ糧食の不足に、其土地良民の米穀を掠奪して、以て之れが欠を補ふ、彼れ是れ以て縱令よ其生を保つ、若し然らざれば彼れ殆んど其生活の道なきものとす、豈よ啻よ米穀のみならんや、苟も必要の物、若くに兵士の慾を滿す物とし云へば、何まれ用捨なく、皆な之を掠奪し、又其農民婦女の身よ對しても、殘虐の振舞を爲し、其不規律混亂に、殆んど物の譬ふ可きなし、去れば清兵一たび牙山に上陸せし後ちに、同

地方の韓民に、陸續遠方よ逃走し、數旬の後ちに同地方米穀其他の必要品、復た一も掠奪す可き物なきに至れり、是も清兵の大患、漸く將さに轉營せざる可らざるの勢ひよ逼らんとす、然れども日本兵と對峙の勢ひ、彼れ未だ容易に轉營する能はずして、此に對陣す、彼れ其困難想ふ可し。

右よ引替へたる日本兵の入韓に、初め海軍仁川よ上陸し、京城よ入りて、以て我が公使、及び人民を保護し、尋いで陸軍到着して、以て之れに代りて之を保護す、其間陸海兩兵、俱よ規律嚴重、隊列整齊として又整肅、千万一律、心中皆な理義を存して、以て動かざること山の如く一令の下よ運動する、恰かも將校自ら手足を使ふが如くにして而して韓民よ對して、毫も妨害を與ふることなく、之を牙山の清兵よ比す、天淵月鼈の差あり、固より日を同うして語る可らざるものあり、故よ日本兵の京城よ入るや、歐洲諸國

牙山の清兵
民家ヲ亂入ーて
糧食を奪ふ

の人民の賞賛ハ勿論韓民と雖ども、日本兵威嚴の整肅なるヨ敬服せりと云ふ、嗚呼何ぞ日清兩國、均しく是れ東方亞細亞先進の邦國ヨして、而して其兵制の差、此の如く太甚しきや、其整不整の異ある、吾人をして轉た奇異の想ひをなさしむるものあり。

事態既ヨ此の如し、是ヨ於て日清兩兵ハ、京城牙山の間ヨ陰然對峙して、以て一號令の下ヨ動かんとするものゝ如く、又仁川灣ヨハ、日清兩國の海軍、陰然對峙すること、亦陸軍ヨ於けるが如し、此時ヨ當りて、清兵ハ又義州方面より、進んで大同江平壤の間に屯もるの兵ありとの報達す、嗚呼此時既ヨ東學黨は殆んど煙散霧消して、其形跡を見ハさず、而して其戰雲ハ形を變じて、以て京畿忠清の原野ヨ落ちよけるは、是に於て朝鮮の方面漸く將さヨ一變せんとするに至れり、蓋乎亦測る可らざるハ外交の兵勢ある哉。

此の形勢を見て、韓廷ハ益々恐怖し、東學黨既ヨ鎮靜の趣きを以て日本兵の撤回を乞へるヨ、我れハ兼ねて全く鎮靜を認めずとて之れヨ應ぜず、又清兵ヨ向ても、右同樣の趣意を以て、援兵の依頼を取消す旨の通知ヨ及びしかども、是れ亦從ハず、形勢日ヨ益々切迫し、日清兩國の大軍、何時衝突せんも測られず、殆んど危機一髮の間ヨ在るものゝ如くなれば、朝鮮の人心惶々として安からざりける、畢竟此の事たる、嚮きヨ朝鮮ハ、我れに向て獨立國たる事を公言せしよも關せず、陰ヨ清を上國と仰ぎ、年々貢使を送るあるの事あるハ、自ら清國の干渉を受くるものゝ如く、又清國ヨ於てハ、亦陽ヨ朝鮮を屬國あらずと云ふよも係はらず、密かヨ公使袁世凱をして韓廷ヨ囑ぞ入れしめ、百事干渉するを以て、我れハ大ヨ之を怪訝の事ヨ思ひ、今回の出兵を幸ひ、此時を以て兩國の關係を斷ち、朝鮮をして純然たる獨立國たらしめんと欲する

義俠の心を起したるあり、實に是れ我邦戰國の男兒中の男兒、上杉謙信の事業、若くは近世伊國の俠骨男兒「ガリバルディ」の事業、其義擧を更らに偉大ならしめるものあり、先人稱す「昏亂の世に雖ども公論猶ほ存す、此れ人性の善なる處を見る、此れ乘奬の亡びざる處を見る」と今や第十九世紀鐵血社會も、猶ほ此の義擧ある、未た以て腐肉强食の世界とあらざるを信ずるなり。

是れよりして後ち、日本の清國に對して請求する所のものゝ、彼れ之を拒絶し、清國の日本に向ひて請求する所のものゝ、我れ之を拒絶し、朝鮮其間に介して姑息の策を執る、我れ大鳥公使を以て、韓廷に勸告する所あれば、清國公使袁世凱、百方之を妨碍し、日清韓三國の關係麻の如く錯雜し、談判日に益々急あり、此間日清の艦海軍も、益々到着して戰備愈々整頓し、一號令下らば、忽然眼、各々互に取諸に相見えんとす、搏へける、鋒未だ接たず、其聲聞

えずと雖ども、鋒鏑既に其内に在りて、鬼神早く之を聞く、此時に當りて、赫灼たる天日は、東より出で、西に沒し、未だ敢て砲煙硝烟に蔽はれずと雖ども、而かも深く彼我の外交政略と、其目下の形勢とに通ずる者の心眼には、既に砲煙硝烟の間、髑髏として飛び血迸るの修羅場を目擊するものあるに似たり。

○第三回　砲聲始めて聞ゆ大鳥公使の入城

日清韓三國の關係麻の如く錯雜し、談判日に益々急として、今や既に形勢切迫す、是に於て我が大鳥公使は、最後の手續として、韓廷に向ひて三ヶ條を提出し、三日を期して、之れが決答を要求したるに、折角の勸告も盡力も、皆な水泡に歸し、朝鮮の頑固黨執政閔族は、清國公使袁世凱と謀り、内外相應じて、大に發する所あらんとするものゝ如く、其形勢頗ぶる顯然たるものあり、且つや最後決答の猶豫期限たる、我が七月二十二日の夜半も既に去り、殆

んを談判の果しあきを見て、我が大鳥公使は愈々最後の處分を行はんと欲し、親しく國王を謁見し、具さに事情を陳ぜんとて、我が七月廿三日の曉天より準備を整へ、特に前夜來、城中頗ぶる不穩の樣子見ければ、万一不慮の備へとて、龍山の軍營より來りたる若干の兵を護衛として、以て之を率ゐ、又別に一隊を王城の周圍に配置して、以て防禦に備へ、内外の準備既に一齊に整頓せしかば、愈々同日午前五時四十分、朝風に英氣を鼓し、公使館を出で、進んで王城に入らんとして、既に景福宮興化門前に到り將さに其興化門に入らんとするや、彼れ環て示し合せたる所やありけん、景福宮靖二宮に屯在せし韓兵、不意に俄然突如として起り、無法にも何の會釋もあく、小銃を連發して、大鳥公使に向ひて狙撃し、且つ我が護衛兵に向ひて戰ひを挑めり。

是に於て大鳥公使は、暫時進行を止めざるに、是れを同時に護衛

兵は一聲雷霆、隊長指揮の下に、俄然驟起し、就口を鋪へて之れに應戰し、彼れが閉したる正門を押開きて突入するや、彼れ不熟練の雜兵、如何ぞ能く敵す可き、彼れ皆な倉皇狼狽、心魂を天外に飛して遁走せり、此時豫て王城の周圍に配置したる我が別隊も、亦韓兵の發砲を受け、彈丸雨雹の如く飛び來る、事既に此に至る、何とて猶豫す可き、謹慎に謹慎を加へたる、耐忍强き我が兵も、亦俄然夜叉の怒を爲して驟起し、忽ち天地も崩るゝばかりなる吶喊の聲を擧げ、直ちに城門を衝き、且つ雲の梯子を、城壁の四面に架し、日本男兒の猛夫、各々我れ劣らじと先きを爭ふて、城中に突進せり、斯くまでとは知らぬ韓兵、面り此の勇狀を見て、狼狽殆んど爲す所を知らず、紛擾混亂、我れ先きに逃走せり、去れば事端は大あるが如しと雖ども、敢て左したる激戰もなく、午前六時頃に、王城全く日本兵の守る所と爲りて、韓兵亦復影を留めざるに至

知事公徳大院君を
擁護して宮闕に
入らんとす閔族之
を拒ぎ砲撃す

りける。

此の役韓兵の敗走するや、多くは皆な兵器を棄てゝ遁逃したるを以て、我が兵は其散亂する兵器を押收しけるが、其武器は頗ぶる多く、其中十五門の大砲は、何れも新式のものゝ係り、蜂巣連發砲あり普通の大砲ありて、之れに伴ふ彈丸硝藥もあり、加ふるに又五百餘挺の小銃も、多くは是れ新式の瓦銃にて、火繩筒の如きは甚だ少なく、其良銃は、今回或は支那より送り來りしものならんと云ふ。

大鳥公使は交戰既に収まりしかば、直ちに又護衛兵を率ゐて王宮に赴き、親しく國王に謁見して、以て他の奏聞と俱に此の始末を上奏せり、是に於て國王大に動き、多年閔族茶毒の夢を覺させられけるが、聞きに大鳥公使の一行が挑戰に遇へし時、韓王の父、開化黨の領袖なりも謂ふ可き大院君、豫て押籠め隱居を爲り居りしが此時大鳥公使を同伴したりと云ふ、道は國王の命に依り、豫め同行を約せしに因れり。

今其顛末を記さんに、元來國王は、我が勸告を是認し、之れが實行を望むと深かりしに、开が補佐官たる閔族の頑迷なる圧命に背きて、深く清國と結托し、國家の存亡を賭して、以て一身の利を計り自ら政權を執りて、其專横名狀す可らざるに至り、終には清國の敎唆に乘り、或は日本に敵對せんも亦測る可らざるの形勢を呈するに至りしかば、國王も亦最早放棄し難しとて、我が六月二十二日を以て大政上に關する內旨を大院君に傳へ、之れに委ねるに攝政の大任を以てせり。

是に於て大院君は、王命を以て、清國との關係を一洗して、以て獨立の實を擧げ、一般の改革を實行せんとて、總ての保證を大鳥公使に求めたり、抑も其所謂保證の意味は最も廣くして、即ち清國

の干渉を拒絶して、以て獨立の實を擧げ、且つ政府の全權を握れる閔族を退けて、以て改革を實行するに就ての總ての後見役を、大鳥公使に托したるものにて、彼の牙山屯在清兵の國外放逐より、將來或い發生す可き、內亂の鎭撫等い、勿論凡て朝鮮の獨立と改革に因て生ずる、內外の事件に對し、最後の保護を求めんとするに在りて、頗る繁雜極まることありと雖ども、斯の如きい除め我が政府の期したる所あれば、大鳥公使い、敢て本國政府の意を問合いするまでもなく、直ちに之を承諾せしかば、大院君い大に滿足し、是れにて免ゴ盤石の基礎を固め得たり、と國王と俱に大に其厚情を謝し、此に奮ひて非政の革新に從事し、專橫極まれる閔一族を、悉く退けしのみならず、失政の極、今日の難境に至らしめたる閔泳駿以下、重なる者を洗刑に致し、且つ一般施政上の大改革を決行して、以て開化黨の新內閣を組織せり、是れ實に朝

鮮の一大變革あり。

却說廿三日より、午前の朝戰終りし後ち、亦一小戰あり、即ち其朝戰終るの後ち、我が兵い東大門の左に當り、東營の引渡しを求めたるに此に屯在せる韓兵い之を拒絕し、我れに向ひて發砲したるを以て、我が兵之れに應じて戰ひけるが、未より當の敵に非らず、五分間にして忽ち之を退拂へ、此に京城の兵燹全く收むるに至れり。

抑も當初清國い韓王を擁して、以て本國に拘禁せんと謀りしなれども我が兵の守備嚴にして、事容易に行われる可き見込みもなければ、今度い更らに前年の如く、大院君を連れ出さんとし、袁世凱を以て韓廷部內、閔族の文武官と共謀して、以て孫て其乘ず可き機會を待ち居たるに、偶々國王が、大院君を起して、以て改革の任に當らしめんとし、而して大院君も亦進んで此の任を盡さん

との意見を懷ける旨を聞き、終よ非常手段よ訴へて、以て大院君と同行せる大鳥公使、及び其保護兵よ向ひて狙撃して、而かも何の功をも奏せず、陰謀此よ皆な破れて、復た爲す可きの策あきよ至れり、是よ於て此上ハ、愈々最後の手段、日清兩國、俱よ干戈を執りて、以て戰場よ相見え、軍神の裁決を乞ハざる可らざるの勢ひとハおりぬ、噫勢ひ乎勢ひ乎、勢ひハ自然を以て推移す、區々一人一涙の如何ともす可らざる所なり、事既よ此よ至る、亦是非もなし、此の上ハ、日本男兒の鐵腕、日本刀の鋭利を以て、彼れが首よ加へんのみ、彼れが千歳の迷夢を覺破せんのみ、復た他あらんや。

我が日本ハ四千萬の人口を有し、彼れ清國ハ無慮四億萬の人口を有す、其人口十倍の差ありと雖ども、然れども天下の事、豈よ只よ頭數のみを以て事を爲さんや、千羊ハ一獅よ若かず、萬個の冬瓜ハ、一塊の黄金よ若かず、彼れ豚尾漢、如何よ頭數よ富むと雖ども而かも我れ一人よして、以て彼れ十人を相手とす、則ち其力比敵す、若し我れ一人よして、能く二十人を相手よすれば、則ち其力二倍して以て北京城下の盟を爲さしむるよ餘りあり、若し又我れ一人にして、能く三十人を相手にすれば、則ち其力三倍して、以て清國十九省を蹂躙するよ餘りあり、噫日清の衝突、陰然此に其事端を開けり、是れより將さよ獅子と羊との戰鬪ハ開かれんとす乞ふ刮目して之を視よ。

○第四回　豐島の開戰清軍魚腹の肥し

多年親密なる日清の修交も、今や愈々破裂の時機よ逼る、即ち其第一の交戰地ハ、豐島の近海なり、抑も豐島ハ、仁川牙山間の小阜島を、微南西よ距る、凡そ七哩半の洋中よ在る、一小島よして、清國陸海軍の根據たる、威海衛、旅順、芝罘、其他と、牙山の航路よ當り、仁川の錨地より、凡そ二十六哩、牙山沖より二十一哩を隔て、其近海

ハ水深くして、暗礁等あく、海軍の操縱にハ、最も適當の場處あり。

時ハ是れ我が明治廿七年、七月廿五日、午前七時、清國軍艦操江號ハ、兵士を載せたる運送船一艘を護衛し、大沽より牙山に向て進航し來りけるヨリ、豫て牙山港ヨ碇泊中の清國軍艦、濟遠、廣乙の二隻ハ之を迎へんが爲め同港を出でゝ進航しけるヨ、此時しも偶々我が軍艦吉野、浪速、秋津洲の三艦、仁川に向て航行中ありしが、恰も豊島の近海にて彼我の兩艦出會せり、是ヨ於て我が軍艦の一二ハ將旗を掲げて、相當の禮式を表したるヨ、彼れ當ヨ之れヨ應ずる禮式を爲さゝるのみならず、彼れ遽かヨ戰鬪の準備を爲し、我れヨ向て敵意を示す、然れとも此の處海面稍々狹隘なるを以て、我が三艦ハ、方向を西南ヨ轉ぜて、沖ヨ出でけるヨ、此時彼我の距離、稍々接近するヨと見えけるが、彼れ忽ち發砲を始めたり、我が艦隊ハ、豫て斯くもあらんかと期したることなれば、直ちヨ

之れヨ應じて砲戰したるヨリ、平波洋々たりし朝鮮海ハ、霹靂一聲、萬雷轟然、硝煙濛々として空天を蔽ひ、赫灼たる天日も、爲めに其明を失し、狂瀾怒濤捲いて半空に躍り、以て鯨鯢の夢を破る、其光景の壯觀、地ハ天と爲り、天ハ地とならんかとヅ怪なれける。

戰端既ヨ開かれ、我が艦隊烈しく砲擊しけるヨ、彼れ敵せずとや思ひけん、凡そ一時二十分ヨして、彼れ鼻怯ヨも逃走せり、即ち其一艦濟遠號ハ、渤海に向て逃走し、又其一艦廣乙號ハ、速力著しく減じ東濟岸ヨ近き淺所ヨ逃走せり、此時しも歟ち又遙かの沖合より二艘の汽船來るヨ遭ひけるが、次第ヨ近づき見れバ、則ち清艦操江號ヨして一ハ英國の商船旗を掲げたる支那の運送船あり斯くと見るより、我が秋津洲艦ハ、清艦操江號を砲擊して、以て歟ち之を捕獲す、是れを日清開戰の第一着、即ち我が勝利の手始めを爲す、乞ふ左ヨ其詳細の顚末を記さん。

此役我が吉野艦は、清艦濟遠號を目掛けて烈しく砲擊しけるよ、砲丸命中し、彼れ痛く艦體を破られ、廣乙號と、東西其方向を異よし、西よ向て逃走しけるよ、吉野艦は遁さじと之を追擊せるよ、彼れ、恐怖の餘り、逃走しながら大砲を連發せるが、固より速てゝの發砲あれば、殆んど一も我が艦よ命中するものなく、多くは是れ空を掠めて、遠く我が艦の背後よ落ち、其稍々覘ひの定りたるものも、我が艦の前面に落ち、徒らよ海水を飛散して、以て水中の魚を驚かすのみ、之れよ反して我が艦より發する砲丸は、一も艦發あく、遂よ彼れが舳部を打貫き、多くの損傷を與へ、帆柱折れ、艦體破れ、今一丸よて海底の藻屑と爲し、與んずと爲す折りしも、彼れは死物狂ひよ遁げ、淺瀬をも構はゝいとそ、蒸汽の速力よ任せ、只管よ逃走しけるよ、吉野艦は、數時間の後ち、遠戀あがら長追せずして引上げたり、去れば濟遠號は、繰かに海底の藻屑とあるは

死れたれども、痛く我が砲丸よ破られたれば、復た再び起つ能はざるよ至れり、抑も此の濟遠號と云へるは、北洋艦隊二十一隻の中よ於て其第三位以上を占むる鋼板製巡航艦よして、其噸數は、二千三百、馬力は七千五百、大砲は假裝八インチ砲三門、六インチ砲二門、其餘機關砲十二門、合計十七門を備へ、其速力は十八ノット内外よして、防禦甲板あり、又別よ魚形水雷四個を有するものありと云ふ、然らば先づ上等部類の軍艦あり、嗚呼彼れ上等軍艦よして、其敗狀既に此の如し、其餘の艦隊亦知る可きのみ。

偖て又彼れの敗績、第二幕れの慘狀は廣乙號よして、彼れは我が砲擊の爲め大破損を受け、速力大よ減じ、東濱岸よ向て遁走せり、抑も朝鮮の西海岸多島海は、數多の小島嶼星羅碁布し、且つ其間諸々よ淺瀬點在して、海淺く暗礁多く、大艦は迚も其間を航行し得可らざれば、我が追擊の艦隊の爲めよは、大に不便あれども、彼

戦ふ海軍
孫江帥を捕へ
廣乙將速の二艦を
走らん

れ廣乙號は、不幸中の幸なるも、其艦體小さかりせば、斯る多島海とそ、彼れか逃げ場よ好都合の地よして、彼れ廣乙號は、我が軍艦よ烈しく砲擊され、倉皇狼狽、其船體を捨るよと見にけるが、一帶の淺瀨をくゝり入り、岸邊よ沿ふて其妻を了隱しける、我が艦隊は早くも此の體を見て、續いて乘り入らんとせしが、何がさて廣乙號よ倍する大艦なれば、其意よ任せず、旦つ到底自滅と極まりし同艦のとよしもあれば之を捨て置く共敢て妨げずと見逃せしが、果せる哉、後ち聞く所に據れば、彼れ終よ岸よ近き沙上に乘り上げ、乘組員は宛然蜘蛛の蜘か、蜂の巣よても破りしが如く、衆皆な先きを爭ふて、八方よ散走せり、然るよ彼等既よ上陸散走せるの後ち如何おしけん彼の廣乙號の空艦は、欺ち火を發し、終よ炎々たる猛火の中よ包まれ一片の廢艦と爲りたるは、憐れと云ふも亦愚かなる次第なり、但し右廣乙號は、一等水雷砲艦速力十七

海里よして、十二糎「クルップ」式速射砲三門六斤、速射砲四門、及び機關砲數門の外、猶は水雷發射管四個をも備へしものありとそ、是れ後ちよ我が軍艦高千穂、及び摩耶の檢視よて知られしあり。

此時清國より兵士を搭載したる運送船を保護し來れる、該國軍艦操江號は、我が軍艦秋津洲艦よ前く砲擊せられて、命中やしけん、俄ち降旗を了樹てたりける、我が艦は、敵艦の餘りよ意苦地なきを怪み、或は如何なる詐謀あるやも知る可らずとて、充分水雷を用意し、砲門を開き、去來と云へ、一發の下よ打沈め奥んとの準備を爲し、短艇を卸し、一人の士官、十數名の水兵を隨ひ、充分よ注意して、操江號の甲板よ打上れば、操江號の乘組は艦長を始め、皆な一同甲板上に整列し、拜禮して出迎へ、艦長は我が士官よ敬禮しつゝ、先づ其帶劍を捧げたり、是よ於て降參の儀式終りたれば、我が水兵は、悉く彼等の武器其他を一からげと爲して、我が軍

艦より轉覆しけるが、是れと同時に、彼等八十餘名の豚尾漢に、皆あ保虜とゞ爲られける、但し此の操江號に、北洋艦隊より屬する木製軍艦にして、其噸數に七百、馬力に三百六十、且つ大砲四門を備へたるものなりと云ふ、是れ今を去る三十年前の製造より係れる老朽艦なりと雖ども、而かも其艦内の構造より據付けある諸兵器等に、多くに近年に至りて改良を加へたるものあれば、既に捕獲軍艦として我が有より歸す、亦一廉の用より立つ可きものなりと云ふ手始めの捕獲、亦勇しと謂ふ可し。

此時我が浪速艦に、彼の清國軍艦操江號、既に我が秋津洲艦より下るや、直ちに彼の清國の運送船高陞號より向て、空砲一發投錨を命じたり、是れと同時に我が司令官に、都下より向て、該船を本隊より連れ來る可しとの命を下せり、依りて人見大尉を派して船内を取調しむるに、該船より、清國の陸軍兵、凡そ一千百餘人を乘込ませ

め、武器を山積し、清國政府より雇はれ、今しも牙山より航行中なりと告ぐるにゞ、然らば此の船に本艦より續き來る可きやと問ひしに、船長英人某に答へて曰く、我れに助あし、唯だ貴命の儘のみ、と因て直ちに投錨せよと命ぜしに、彼れ願くに端艇を送られたしと乞ふ、我れ之を許し、直ちに端艇を送りけるが、此時派遣士官に、船長と對談せしに、船長曰く、清國兵に、余の本艦より續行するを許さずして太沽より歸航す可しと主張す、と此間船内に、頗ふる騷然、我れに對して敵意を示めすを見る、而して船長以下、外國の雇人に、大に清人の脅迫を受くるものゝ如くなれば、斯くと見るより我が浪速艦に、信號を以て該船長に、其船を見捨てよと合するに、彼れ又端艇を送られよと信號するに、我れに彼れの端艇より來る可しと信號す、船長等に我々に許されずと答ふ故に我れに清兵益々船長を脅迫し、我が命を拒むものと認め、前檣に赤旗を掲げ、同

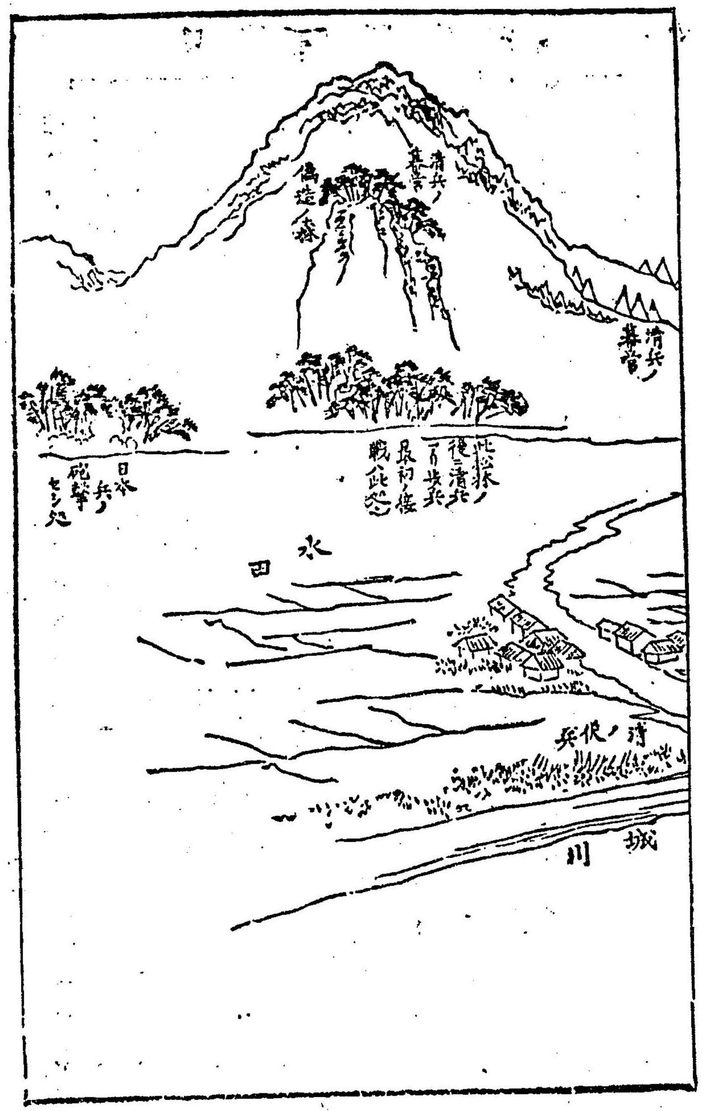
運送船
商陸號
我が砲撃ヲ
運ひ沈没セ

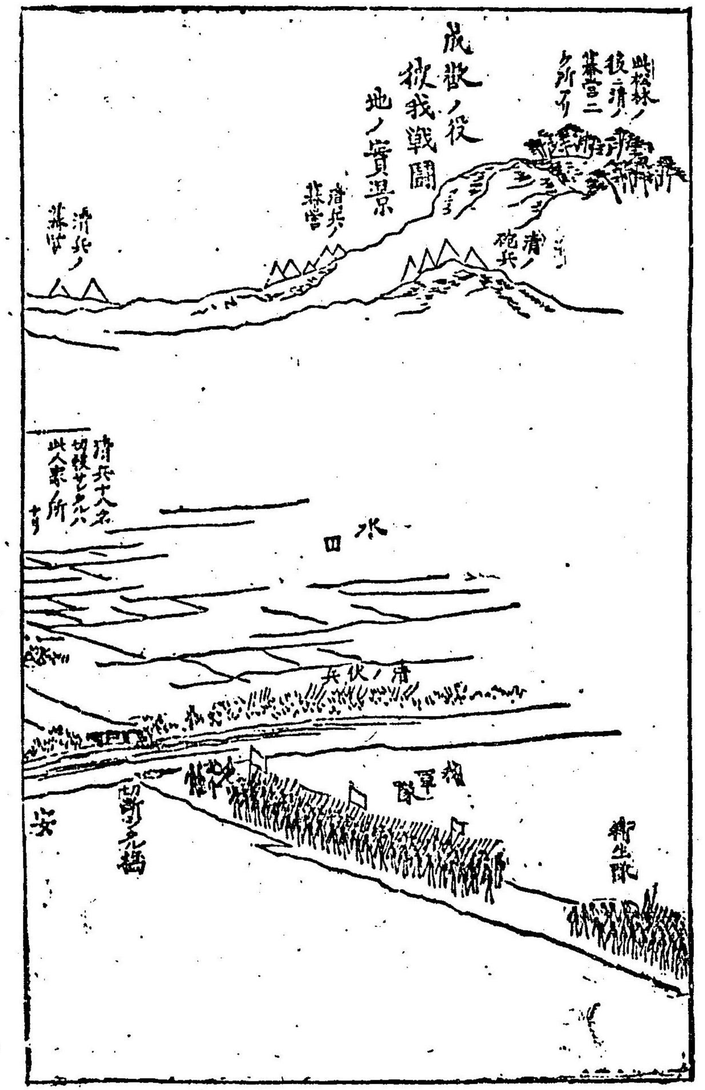
時に信號を以て、直ちに其船を見捨てよと命じける、去れば船長以下外人は、愈々破壞を決しけるが、同日午後一時、我が浪速艦は、憐れとは思へども已むを得ず、轟然一發の大砲を放てるを見事なれば彼の艦部を打貫きたれば、船の半身は欹ち水中に沒し、見る〳〵逆立ちて、二三回クル〳〵廻るよと見えけるが其儘沈沒せり、此時船長以下外人は、皆な早くも海中に飛入りけるを、無情なる清國人は、之を見て狙撃したり、我が軍艦よりは端艇を發して、船長以下、運轉手案針手等を救助せり、然るに其愈々沈沒するや、清兵中甲板上に在りしものは附近の島嶼に泳ぎ行くもあり、或は板切れに蟻附するもありて雷し海上は悲鳴哀聲を以て滿され、憐れ皆な海底の藻屑と爲りて、以て魚腹を肥し、其能く生命を拾ひ得たる者は、僅々十數人に過ぎざりしと云ふ、實に憐れとも、彼れが頑迷なる、自業自得、亦是非もなき次第と謂ふ可し。

此の役捕獲軍艦操江號に乘組みたる、清國士官以下八十餘人は、右捕獲地より、直ちに佐世保に護送せるが、彼等俘虜と雖ども、其在職中の官職階級に基き、士官士卒等の區別を設け、各々以前の身分に隨て室を異にし、衣服飲食物等に至るまで、我が兵士に準し、多少の斟酌を加へ、至極鄭重の取扱ひをおしつゝあり、故に彼等は、慷慨悲憤、恨みを楚囚に呑めるが如きの體あく、寧ろ却て案遇氣樂に生を送るものゝ如しと云ふ、嗚呼海戰飯に開かれたり、陸上の模樣果して如何、乞ふ更らに左に記する所を見よ。

○第五回　安城渡成歡の激戰及び牙山の占領

初め清國の策士李鴻章の心算に、前は牙山に軍を出し、北は平壤に兵を發し、遠く京城仁川間に在る、我が陸軍を包まんとす、然れども我れ豈に鼠に非らず、如何ぞ其れ之を包むを得んや、況んや


清兵ノ墓
清兵ノ墓
偽造人形
清兵ノ墓
日本兵ノ砲撃セシ処
此林ノ後ニ清兵ノ一部隊
最初ノ接戦ハ此処
水田
清ノ伏兵
城川


此林ノ後ニ清ノ墓ニ二ケ所アリ
嵐散ノ役
敵我戦闘地ノ實景
清兵ノ墓
清兵ノ墓
清ノ砲兵
清兵大ニ切歯セシ所ハ此人家所ナリ
水田
清ノ伏兵
安
新元橋
我軍
御生隊

彼れが發ゝ頗ぶる粗ある丶於てをや、彼れ南北相救ふ能ゝずして、終に一敗地丶塗る可き、亦知る可きのみ。

抑も我軍進發、牙山清兵擊攘ひの原因ゝ、去る廿三日朝鮮內政改革の結果として、大院君ゝ斷然決する所あり、王命を奉じ、我が大鳥公使に囑するゝ牙山清兵放逐の件を以てし、且つ自ら書を認して、委任狀を大鳥公使ゝ渡したり、是ゝ於て公使ゝ、其旨を大島旅團長ゝ通ぜしかば、旅團長ゝ更らゝ福島中佐、長岡參謀等ゝ謀り、各隊の部署を定め、愈々廿五日を以て、進軍の令を發したるゝ是れ恰も豐島海戰の當日ゝして、陸軍是れより將さに動かんとす。

初め清軍ゝ、牙山に據りたるが、牙山の地形、漸く防戰不利あるを察し、殊ゝ海軍との聯絡ゝ、既に豐島の一戰ゝ於て絕たれたるを以て、其七八分の兵ゝ、同地を距る四里餘東方ゝ位あする、成歡驛に

轉陣して、以て我軍の來るを待ち受けたり、抑も此の成歡驛と云へるゝ、背後ゝ聳峯起伏蜿蜒として西北ゝ連り、前面一帶ゝ、水田、八部、畑殆んど二分を占めたる耕地にして、且つ其間ゝ溝渠あり、河川あり、又沼澤ありて、一條の街道さへも、幾度か衣を褰げて渡一らざるを得ざる處あれば、其他小徑耕路の進行ゝ困難あるゝ、蓋し思ひ半ばゝ過るものあり、之れに加ふるに其田畑を間ゝ狹み驛の向側ゝ、小高き丘陵ゝて、連亘數里、諸處ゝ松林あり、又此の丘陵の後方ゝ、禿々たる高岳重疊して、牙山地方の山岳と連續し、牙山ゝ通ずる數條の街道ゝ、其溪間、又ゝ腹部を走れり、去れば彼れが防戰の地としてゝ、天險の地勢、既ゝ充分なりと謂ふ可し、且つ又彼れゝ六連發の小銃と、無烟火藥を用うるものありと云へば、兵器の上ゝ於ても、亦我が村田銃ゝ對して、敢て劣る可きものあらず、然り而して其兵の優劣戰況ゝ、果して如何、左ゝ記する所ゝ、

充分之を既明して餘りあり。

蓋し察するゝ、我軍一たび南進するゝや、彼れゝ其兵を二分し、其過半を山路より成歡地方ゝ出し、前營の羽翼を水原附近まで延長し、又他の一隊を沿海の道より、南陽附近まで哨兵線を張り、本隊の勢力三分の二を擧げて、以て我軍の南進を防禦せんとしたるものゝ如し、即ち初め牙山ゝ據るの兵、凡そ四千、其内二千五六百、殆んど三千ゝ垂々とするの兵を以て防禦ゝ充てたるなり、我軍早くも亦此の軍略を偵察したるゝや、我軍亦二隊ゝ分れ、一隊ゝ山路、水原成歡地方より、又他の一隊ゝ、沿海道南陽倉津地方より進軍せり、去れば日清兩軍出會ゝ、歩一歩、愈々目前に迫れり。

斯くて山路より進撃したる我軍ゝ、時恰も大暑の候ゝて、宇宙ゝ宛然炎帝火焔の傘を張りたるが如く、殆んど金を鑠かすゝも風

せず、勇氣益々凜然として、廿七日の拂曉、未だ東雲の全く晴れやらぬ頃、水原附近ゝある貞松と云ふ地ゝ進みたり、此時しも前營の斥候兵、疾く馳せ來りて報ず、前路鰲山ゝ牢大隊以上の清兵あり、と然れども我れゝ此の如き小兵ゝ向て兵を弄す、寧ろ神州男子の氣象ゝ耻るゝ能ゝず、因て使を派して穩かゝ彼の兵ゝ撤去を命じたるゝ彼れ頑迷ゝも、螳螂の隆車ゝ向ふが如く曾ゝ之を肯せざるのみならず、彼れ忽ち小銃を亂發して、以て敵對するゝ、我れゝ是非もあらばとて、直ちゝ之れゝ應じて銃戰しけるゝ殆んど三十分間、敵兵次第ゝ加ゝり、凡そ六百五十人以上に上り、彼の兵隊の中、別ゝ一隊劍銃を連ね、大聲を上げて、彈雨の中を突進し來る一隊あり、其が中ゝ一人豚の如く肥え太りたる大漢、穗長の銃を流々と振廻して突進する者ありけるゝ、坐に燕人張飛の畧しを想見するものあり、丈八の蛇矛も何のその、其體の肥大な

るに、却て銃丸の的にに、至極適中のものよて、氣の毒よも、我が精兵の發射する銃丸の爲め、彼れ勇怯差別あく、皆お將蔕倒よ射倒されけるゞ憐れある次第ある、彼れ其実驍兵飯よ然り、其餘の兵、皆お終よ潰走し、差しもの險山の要害脆くも我軍の占領する所と爲る、是を手始の吉兆とし、更らよ勇氣百倍し、牙山を指してゞ雷發しける。

此時しも又沿海道より前進せし、我軍の一隊に、廿八日午後六時過ぐる頃、南陽附近の花陽よ近づきしよ、清兵の一隊此の地を恵守するを見る、我れ使を遣にして撤去を命じたるよ、一時に殆んど抵抗をも爲さんずる勢ひなりしが、我が兵勢よ膽をや冷しけん、彼れ皆お遁走せり、既よして海門よ到るや、此の地よも亦凡そ六七百人の清兵あり健氣よも我軍の前進を防禦せんとする態晴よや烈しく小銃を連發せるが、固より比す可きの敵よ非らず、

我れ忽ちよ之を擊破して前進す、既よして貫進倉を經て、牙山よ向ひしに、實よ廿九日あり、然れども其激戰に、重よ山路進軍の力に在り、乞ふ復た筆を戻して之を記述せん。

却説我が山道軍に、二十八日を以て索砂場に到着せるが、先づ全軍を道傍松林の中よ休憩せしめ、將校各々望遠鏡を執りて、成歡の敵營を望めゞ、則ち遥かよ六千メートル以上の山背、其壘壁の模樣、天幕の數、兵士往來の狀況よ至るまで、皆お點々として、我が將校の眼底よ落ち來れり、是よ於て我が軍議に開かれたるが、名よし負ふ敵に、險難の要害を占め、我軍の進行よに、河川沼澤等の障碍物許多ありて、頗ふる困難の地勢なれゞ、我軍の司令部に、白豊配兵の不利なることを認め、且つ地理偵察の爲め、各隊より斥候騎數名を派遣し、愈々地理偵察の上、其進軍の道路、其配兵の部署を定め、二十九日の午前零時、蟲曉たる一聲の笛聲を合圖よ、全

我軍成歩の敵を殪く

軍枚を啣みて進發せり、即ち左翼の一隊は、索砂場より直ちに左に折れ、前面一體に繁茂せる松林に向て進み、又右翼の一隊は、牙山本街道より進みたり、此の夜弦月空天に懸りて、松樹の間、隙漏として我軍の進行を照らす、其影亦地上に寫りて、俱に與に步武を進む、各々心中充分の豪氣を備へ、手腕勇氣充ちて皮肉樹んとし、雙脚英氣溢ちて筋骨躍らんとする、を支へ、整々肅々、緩かに靴音の微鳴、路傍の蟲聲と和して進む、鬼神猶は其壯烈に感じける。

斯くて我が右翼兵は、夜に乘じて進みけるに、名に負ふ道路狹隘とは云へ、且つ凹凸極まりたる地あれば、充分其隊列を整ふる能はず、兵士は各々互に相携へ相扶めて、先づ第一の橋梁を渡りけるが、此時松崎大尉の率ゐたる前衛兵の一隊は、既に第二の橋梁たる安城渡をも打越えて前進せり、引續いて武田中佐の本隊、

及び衛生隊等の餘隊進んで安城渡の手前なる一村落に近づきけるに、此時不意にも突然人家の陰より烈しき銃聲起るよと見えけるが、忽ちにして彈丸の飛び來ること、恰も雨霰の如し、去れば我兵は、一時不意の奇襲に驚きしが、武田中佐は、暗夜の狙撃を避けんが爲めに、直ちに馬より飛び下り、聲を勵まして全軍を指揮し、激しく應戰しけるに、時恰も午前三時四十分、既に流水草木も眠れる靜寂の宇宙は、忽ち肉飛び血迸る喊喊の修羅場と爲り、銃戰凡そ三十五分間、我兵益〻進みて、清兵と相距る二三十間の地に到るや、士官の號令と俱に一齊に銃劍を提げ、天地も碎くるばかりに喊聲して突進せり、此時清兵は、我軍の突擊を防んが爲め、安城渡の橋梁を半ば破斷し、且つ下流に堤防を築きて、以て河水を堰き留めければ、其水路上に沉澱し河か道か殆んど判然せず、特に暗夜のことなれば、戰ひ頗ぶる困難の體に見えたり

ける。

此時しも既に安城渡の橋梁を越えて前進したる、松崎大尉の一隊は、既に橋梁を渡りて、凡そ一町程も進みしと覺しき頃、後方より當りて、俄かに萬雷の音響き銃火閃々として眼を射るよゝ、偖ては我が本隊、敵の伏兵に陷りたりと見ゆるぞ、イザ之を拔はんと、松崎大尉眞先に立ち、疾く飛ぶが如くに安城渡の橋邊に來れば、豈に圖らんや橋梁は既に斷れて通るを得ず、元來勇悍なる松崎大尉は、大に激昂し、是れしきの一小流何程の事かあらん、徒渉して進めや、と一聲の號令と倶に、其身自ら河中に飛び入れり、一隊の將卒は然り、從卒如何ぞ其れ猶豫せん、皆な一同に河中に飛び込めるに、案外にも水深くして首に達し、且つ川底に藥研形を爲して、皆な〳〵と込り込み、其勢ひ頗ぶる危險なるを以て、多くは戰砲を脱して、裸體と爲り、漸く前岸に達するを得たり、然れ

ども其中或は水弱に熟せずして溺死する者十數名に及べり、此の狀態を見て、松崎大尉は益々奮激し、大聲叱咤して、自ら眞先に前岸に躍り上り、身に滴る水を拭ふ暇もなく、全隊を指揮し喊喊して無二無三に敵中に突入し、縱横奮戰す、我が本隊亦突擊し、前後より引包みて夾擊しければ、何かは以て堪る可き、清兵散々に敗走せり、去れば終に我軍の大勝利に歸す可し、唯だ惜む可きは、此の役、松崎大尉大奮戰の最中、流彈に當りて斃る、然れども此の安城渡の勝利は、松崎大尉の奮戰、最も與りて其力あり、其人死すと雖ども、而かも其日清第一着交戰其戰功の美名は、情史の上、千歲に傳へて朽ちざるあり。

前記安城渡の激戰方さに闌なる頃、我が左翼本隊は、早や既に成歡敵壘の、右翼前に在る松林の高地に達し、此に砲烈を布き、敵壘に向て榴彈を發射し、砲擊凡そ十四五回にして、山上に在る敵

の第二壘ハ破壞せられたり、因て第一壘の敵兵ハ、潰走して以て山下の第一壘に據れり、是ヨ於て敵の第一壘と、我軍と砲戰すること暫時に及べるが、敵の彈丸ハ、皆ゐ榴彈のみヨて、榴霰彈おかりし爲めか、我が陣中ヨ來りて破裂するもの殆んどゐるおく、爲めに我軍ハ一兵を損せざるヨ、我が砲隊の發射する彈丸ハ、皆ゐ能く命中し、又能爆發せしかど、此時敵ハ、死傷壘壘ヨ沈し、大ヨ第盛の狀を視ハせり、戰機を視るヨ熟したる大島旅團長ハ、此ヨ全軍を指揮し、左右より、一時ヨ敵壘を攻擊せしめ、又別ヨ左翼支隊の一隊を、山上より進軍せしめ、俱ヨ吶喊し、恰も圓石を千仞の山より轉ずるが如くの勢ひを以て、敵壘に突入せり、是ヨ於て敵兵潰走、第一壘陷り、尋いで又第三壘落ちたり、此時しも我が右翼の一隊ハ安城渡の戰勝ヨ乘じて進み來り、忽ち敵の第五壘を擊ちて之を奪ふ、然るヨ敵の第四壘ハ、最も能く防戰せるが、是れ亦孤

立するヨ及んで支へずして潰走せり、時正さヨ六時三十分初め砲戰起りしより此ヨ至り、僅かヨ二時間ヨ過ぎず、此の役我軍ハ、一人も戰死おく、僅々二十餘名の負傷者ありたるのみ、之れヨ反して清兵の死傷ハ、殆んど三百名ヨ上れり、且つ敵壘の内ヨハ兵器糧食衣帽の類地ヨ散亂して、頗ふる狼籍を極めたり、斯くて敵兵全く潰敗するや、我軍ハ悉く壘内ヨ集合し、皆ゐ我が日本の方位ヨ向ひ、聯隊旗を振ひて、異口同音ヨ、天皇陛下萬歲を唱すること三たびヨ及ぶ、其聲ハ山谷ヨ反響して天を衝き、殆んど京城仁川の間ヨも聞ゆるものゝ如し、東洋亞細亞の覇權ハ、此時早く、我が掌中ヨ入れり。

因ヨ記す、此の成歡の役、清兵ハ、古代の築城術ヨ由りて、皆ゐ其壘壁を五六尺以上の高さにして之を防戰せりと云ふが、我軍中戰術ヨ明かなる者の歡ヨ、壘壁を斯の如く高くするヨ於てハ、寄手

壘下より近づきし時之を射擊するよりも、少くとも壘中より自己の體の胸部以上を現はさゞる可らず、然れども此の如く胸部を現はして、以て壘下より蟻附せる寄手を射擊せんか、寄手の後方に備へたる拔隊は、容易よ之を狙擊し得可し、故よ高壘は、今日の戰爭より適當せる防禦物よ非らず、彼れ今回の大敗、其高壘を築きしも亦其一因ありと云ふ、或は然らん、宜しく心得置くべきことゝなり。

戰評休題、清兵一たび成歡より敗績し、牙山地方より向て潰走するや、我軍は朝來未だ食事を爲さゞるにも關せず、敵の未だ陣備を立て直さぬ間に、疾く追擊せよ、と恰も急潮怒濤の捲き進むが如く、清兵の走路を尾して追擊せり、果せる哉、清兵は大よ周章狼狽し途中まで運送したる大砲を原野に放棄し、彈丸兵器をも、皆あ打ち捨て、四方八方に散亂せり、既にして正午俄かに大雨盆を覆へすが如く降りしかば、我軍亦殆んど前進するを得ず、茲に二時間

程滯留するうち、清兵は皆あ公州指して奔竄し全く其姿を隱して後影を見ず、去れば我軍は敵兵を追擊して此に至り、其走跡不分明を爲るや、己むを得ず追擊を止め、更らに南北の二道を取り牙山に進發せり、途中烈風甚雨の爲め、道路全く泥濘と爲り、且つ朝來未だ食を取らざるを以て、平日よ在りては中々に進行を爲し能はざる可きも、今や戰勝の後ち、兵氣頗ぶる旺あるを以て、其英氣に乘じ、百難を排して、午後三時頃、牙山口なる國覽に入れり此の地に小憩し、又牙山を指してゞ進軍しける、我軍皆あ以爲らく、成歡の清兵敗れたりと雖とも、牙山は是れ清兵の本據あり、必ず死力を盡して戰ふ可しと然るに牙山に到れば、則ち壘中寂然なし、徒らに見苦しき潰走の形跡を殘すのみ餘りの不思議さに、土人に就て之を聞けば、皆あ公州指して遁走せりと云ふ、是に於て我軍一丸を費さず、差しも清兵の本據と聞えたる牙山の本據

我軍間道より
進で牙山の
根據を奪ひ
敵軍根損遁窟に

ん我が掌中に落ちて之を占領し、凱歌高く牙山灣頭に迫れり、嗚々何ぞ其れ亦容易なるや、李鴻章百日の苦心、一日に假せず悲然と云ふも亦愚かなり。

清兵の潰走せる者の中、足弱にして本軍に殘されたる者ん、我軍に遇ふ毎に取り捲れ、恰も兎狩か猪狩かの如くの有樣にて、散々に撃ち倒されたり、然れども三四千の清兵中、豈に亦二三の勇者あからざらんや、清兵潰亂、亦得て支ふ可らざるの醜態を呈して、山谷の間を遁走するに當り、四人の清兵退去せず、我軍の追撃を待ち搏へ、大島少將、福島中佐等の將校、勳章燦爛、馬頭を駢べて進行するに當り、彼れ突然之を狙撃したるも、幸ひにして中らざりしが、右清兵ん、直ちに我兵の狙撃する所と爲りて斃れたりと云ふ。

此の役清兵敗走の途中に遺棄したる物品ん、散亂又散劍、迚も悉

く取集め得可くもあらず、牙山の倉庫内に貯へ置きたる物品、及び我軍の掌中に歸したるものん、彈丸數十萬發、粗食七斗入六七百俵他の食品も亦之れに準じて備へり、其餘軍用電信用の諸器械、地雷火の爆裂藥、火藥、戎服等積んで山の如し、去れば事此の一役の結局に至り、彼れ清兵の死傷ん其幾百人あるを知らず、然り而して我軍の死傷ん、安城渡、及び成歡の激戰に於て、大尉松崎直臣戰死、中尉時山龔造戰鬪中溺死、少佐橋本昌世、中尉山口陸、同守田利貞、少尉山田四郎各負傷、其餘戰死、及び戰鬪中溺死、下士卒三十二人、負傷下士卒五十人、其内入院後死亡せる者五名に及べり と云ふ是れ將た多くん安城渡溺死の者にて、其に戰場に於て戰死したる者ん少なし、殊に差しもの堅壘たる成歡の五壘を拔く爲めにん一人の戰死なかりしと云ふ、亦以て日本男兒、戰場に立ちての勇猛を知る可し、然し此の戰死負傷者の爲めにん、吾人

深く其忠君愛國の精神、其功勞を謝さゝる可らず、此等の勇士あるて、彼の地に戰ひ、敵を退くれぱとそ、吾人本國に在る者ゝ枕を高ふして眠ることを得るなれ、思へぱ厚く其忠魂を弔ゝざる可らざるあり、既にして我が三軍、京城に凱旋す、其盛觀ゝ、殆んど筆舌の及ぴざる所あり、實に我軍ゝ、孤々皆な滿身の名譽を以て入城せり。

喈々一戰にして京城以南、復た敵影を見ず、再戰果して如何、我が海軍艦隊ゝ、八月十日早朝、威海衛に在る敵の艦隊を攻擊するの目的を以て同所に進行し砲臺を砲擊せしも、港內に彼の艦隊在らず彼て砲擊を止め、同日午前八時引揚げたりと云ふ、其後我が艦隊の運轉未だ聞く所あらず、又陸軍の交戰あらずと雖ども、而かも期月を出でずして遠からず、開城、若くゝ平壤の邊に於て、日清兩軍相見ゆるの日ある可し、想ふに今後一戰して黃海平安二道を淸め、再戰して鴨綠江を渡る可し、去れぱ其勢ひに乘じて益々前進す、三戰して遼陽を陷れ、四戰して盛京を落し、五戰して萬里の長城を越ゆ、其間に海軍艦隊、亦威海衛旅順の砲臺を拔き、直ちに渤海に進入し、彼れ長縮奔竄の淸艦を破り、進んで以て天津を屠り、陸海兩軍直ちに北京に逼りて、以て城下の盟を爲さしめんことを、今より點々歷々として、雙眼に映ずるものあり、蓋し本書再板の期に、此等の快聞を記述報道することを得可し、乞ふ讀者刮目して之を待れよ。

○第六回

大本營の移進
平壤城の占領

高麗半島、韓山の風雲漸く北し、我が師團熊羆の嚮ふ所敵なく、前途荷も觸るゝものあれば、百物皆な破碎す、地上何ぞ亦我れを妨げぐる大同江あらん、彼れ頑迷の江流、若し我が進行を妨げば、三軍の鐵脚は蹈破して突貫せん、と意氣既に天を衝いて北進す、清兵ゝ既に豐島近海に敗れ、尋いで成歡牙山に破れ、海陸連戰連敗、渤海以東京城以南復た敵の復影なし、爾來清國ゝ精銳を盡して、平壤に砲壘を築き、日々益々兵を增し、守備を嚴にして、以て此處に日本兵の北進を防禦せんとす、其守兵既に數萬と稱えける、戰雲已に北天に集るや、我が混成旅團の兵漸く不足を感ずるに至り、更らに又師團兵を增發し、野津中將渡韓して以て三軍を部勤するに至り、尋いで山縣大將、節刀を拜して以て出馬す、其意のある所、亦以て知る可きのみ、今後の大進擊、平壤の戰鬪ゝ文祿二年碧蹄館以來の激戰にして、野津中將ゝ、以て小早川隆景に配す可し。

此時に當りて、我が政府ゝ大本營を廣島に進められ、畏くも大元帥陛下にゝ、九月十三日を以て御發輦せられ、名古屋、大坂、神戸、と順次經過せられて、以て十五日、廣島に御着輦せらる、其奉迎送の盛況ゝ中々に述べも盡されざる所あり。

却說野津中將ゝ、愈々平壤の清兵を擊拂ゝんとて、既に京城を進發しけるが、是れより先き一戸小佐ゝ、九月上旬先鋒として一隊の兵を率ゐて、黃海道金川方面を指して進行せり、此に同隊に屬する騎兵少尉某、斥候兵八騎を從ひ、羅長山を經中和に接したる七峰山に遠し、其夜山麓に蹲臥せるに、偶々韓民の、清營に密告する所と爲り、以て清兵の攻圍に落ち、苦戰の末少尉以下四名戰死

し殘餘四名ハ辛くも萬死ヨ一生を得、漸く一方の血路を突開いて以て歸陣し其敵情を報ず、實ヨ目覺しき働きあり、後ち一戸大隊の愈々進んで黃州城ヨ達するや、此ヨ清兵及び韓兵の據るものありけるが、俄ち擊ちて之を拔く、時節柄恰も秋の病葉を拂ふが如し。

是れより先き野津中將ハ、平壤擊拂ヘ、進軍部署を定む、其部署先づ兵を別ちて四道ヨ進め、更らヨ師團本隊より一枝隊を分派するヨ在り、即ち中軍本隊ハ、師團長野津中將之を率ゐ、更らヨ二團ヨ分れ、一ハ月峯山下の綠沙浦を渡り、一ハ氷津浦を渡り、江西縣ヨ到りて、以て左側隊を出し甑山縣路より左右併進平壤ヨ向ひ、又左翼ハ旅團長大島少將之を率ゐ、十二日大同江の南二里の地ある水濱橋より赤屯ヨ出で、十四日大地境洞ヨ進み、十五日平壤ヨ向ひ、又右翼ハ旅團長立見少將之を率ふ、之を朔寧枝隊と云ふ、此手の枝隊ハ十三日、大同江ヨ沿ふて麥田洞ヨ止り、十四日大地境洞ヨ進み、十五日直ちヨ平壤ヨ向ひ、又元山枝隊ハ、佐藤大佐之を率ゐ十三日楸橋ヨ着し、十四日順安ヨ出で、十五日直ちヨ平壤ヨ向ふ、此の如くヨして、五道併進し、十五日の拂曉、攻圍進擊を始め、一戰鏖殺復た餘焰おからしめんとす、是ヨ於て平壤の清兵恰も蠭中の鼠ヨ異あらず、

此時ヨ當りて城兵の防備も既ヨ整頓して、亦遺憾おきものゝ如し、斯くて愈々十五日ヒ爲れば、未だ東雲の晴れやらぬ頃、左翼混成旅團大島少將の方面ヨ當りて、第一の砲聲聞え、此手よりして戰端ハ開かれたり、此手の城兵ハ、毫志超、馬建忠等精說を盡し、死力を以て抗拒防戰したれば、我が混成旅團ハ大ヨ苦戰し、敵の第一壘を拔く、此時ヨ當りて我が先鋒の士官多く戰死し、加ふるヨ彈丸亦盡く、是ヨ於て我軍漸く退却の色を現ハす、時ヨ大島少將

我斥候
黄州ノ
敵兵ヲ
退ケタル
圖

屬聲叱咤して曰く「敵城抜く能わずんば、衆皆な聯隊旗の下より戰死せよ」と既よして衆皆な激厲突進、敵軍を退けて舊位地を回復するよ至れり、混成旅團、斯く苦戰すると雖ども、而かも敵軍率制の目的わ充分達し得たり、何ぞや他おし混成旅團兵の苦戰の爲め敵軍の精鋭を皆な此の方面よ引き、敵をして我が各道より進むの兵、其城よ接近するを知らしめず、彼れ或わ之を知るも、混成旅團の肉薄すること益々急よして、兵を分ちて豫め備ふる能わざらしむるの功わ充分奏したり、

去れば今や我が左翼混成旅團苦戰の中、我が右翼朔率枝隊、及び元山枝隊わ、俱よ東北方面より、平壤よ逼り、直ちよ進擊して、以て第一第二、及び第五の堡壘を陷れ、第三第四の堡壘わ、敢て戰わずして潰走す、是よ於て午前九時よわ、我軍悉く城外の堡壘を拔いて、今わ餘す所、唯だ一の牡丹臺あるのみ、抑も此の牡丹臺わ、昔し文祿の役、小西行長の據りたる城よして、頗ぶる堅固おり、前率元山兩枝隊、三面より合擊し、且つ砲隊之を援けて、頻りよ榴散彈を城中よ發射す、激戰遂よ之を陷れ、更らよ突擊して、玄武門よ逼る三たび突擊して、漸く之を擊破り、直ちよ進んで城壁よ肉薄せしよ、清兵死力を盡して之を抗拒し、我軍未だ之を拔く能わざりけり、

我が左右兩翼の戰鬪方さよ酣おるよ當り、野津中將の率ふる、師團本隊、正面より攻擊を始め、是よ於て三道の攻擊一時よ湧き、砲聲わ人耳を聾して、乾坤を破り、銃擊わ恰も宇宙の爐よ豆を煎るが如く、砲煙硝霧わ空天を蔽ふて、殆んど咫尺を辨ぜず、其間よ立ちて肉飛び血迸るの活戰を演ず、我が師團本隊攻擊の方面よ對して、彼れ奉天府の馬隊、即ち滿州騎兵を以て之れよ當り、頗よる防戰を務む、此の如くよして午前わ、三道の激戰、嘗て止む時お

し、既よして午後二三時よ至り、漸く砲聲止むの方面あり、然れども復た再び砲聲起り激戰、又激戰、夜よ至りて三道の砲聲全く止む、

斯くて十五日午後二三時を過る頃よ至り、朔寧元山枝隊攻擊の方面よ當り、玄武門内の高横よ白旗を靡へし、降參の意を表す、因て立見少將い、直ちよ筆談以て談判よ取掛りけるよ、彼れ偶々驟雨沛然たるの故よ、日將さよ倒かんとするの故を以て、明朝まで待たんことを乞ふ、其談判未だ全く整へずして日既よ沒す、斯くて其夜八時よ至りけるよ、彼れが反覆表裏ある、漸く遁走を始めたり、彼等群を爲して城門を拔出で、或い城壁を乘越えて潛行し、甑山及び義州の方面よ向て逃走す、我軍は此の體を見て、彼れが反覆表裏を惡み、去來其義あらば一人も餘さずこを塵殺せよと追擊益々急あり、彼れ亦往々反戰する者ありて、甑山一帶の原

野い、遙かよ閃々轟々として、最と凄然たる光景ありき、此の我軍尾擊の爲め、遁兵の斃るゝ者無算、數里の道路全く死屍を以て之を蔽ふ、其慘憺悽然たるものあり、既よして明れば則ち十六日よして、夜未だ全く明けざるよ、平壤全く我軍の掌中よ落つ、憐朝鮮第一の堅城、而かも清國の運命を決せんとして精銳を集め、持久の計を爲したるもの、纔かよ一日の價を有するのみ、憐れと云ふも亦愚あり、

此の平壤の役、我軍の戰死、將校八名、下士卒百五十四名、負傷、將校二十六名、下士卒三百七十八名、雜卒三名、外よ生死未詳、下士卒四十人あり、然るよ清兵の戰死い、未だ判然せずと雖ども、凡そ二千餘人、負傷者少おくとも四千前後よ及べりと云ふ、若し夫れ攻守同一の力おらんよい、攻兵の死傷い、常よ守兵の死傷よ倍す可きこと、兵勢の當さよ然るべき所おり、然るよ今夫れ攻者の死傷此

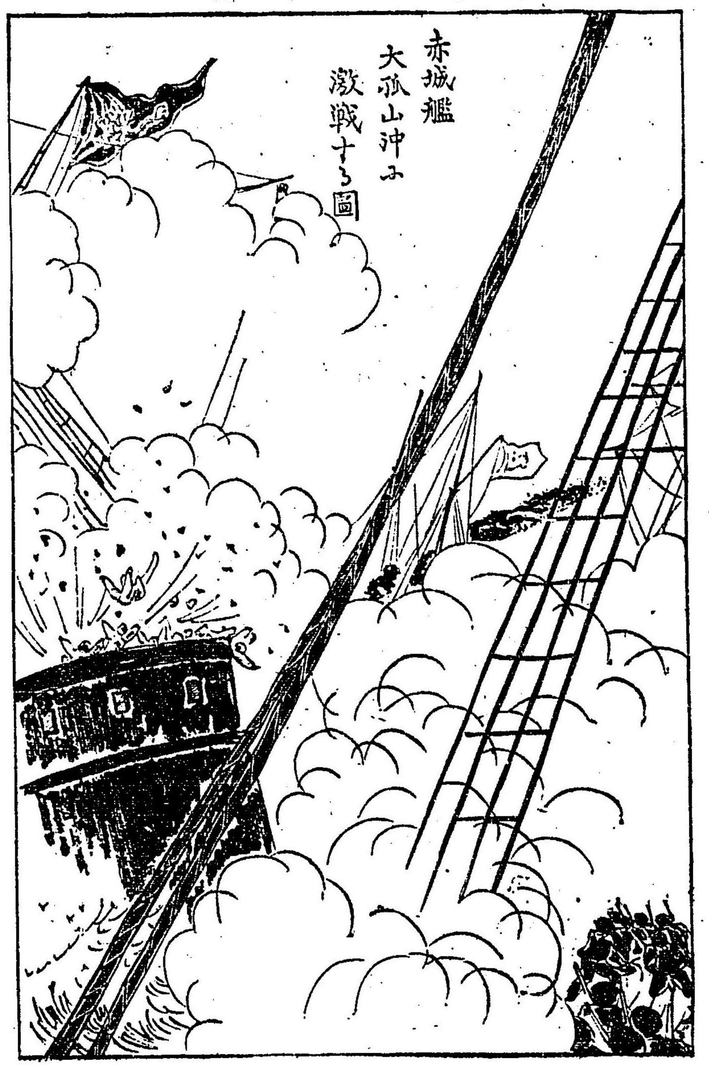
の如く寡少よして、守者の死傷此の如くよ夥多あり、其日清兩兵の間よ、優劣の大懸隔ある、亦以て推知す可きのみ、但し我軍死傷の最も多きn、左翼大島少將の混成旅團よして、其戰死の數實よ百餘名の多きよ及ぶ、然れども他方面の戰功n、之れが爲めよ因るもの多しと云ふ、之れよ次ぐn、元山枝隊第十八聯隊よして、師團本隊、及び蒲寧枝隊の如きn、纔かよ數名の戰死ありしのみ、負傷者も亦甚だ少かりしと、又清兵n、其將葉志超n戰死し、左寶貴n、我軍の捕獲する所と爲れり、但し清兵の俘虜n五百十三名、又韓人よして彼れを援けたる者十四名ありと云ふ、

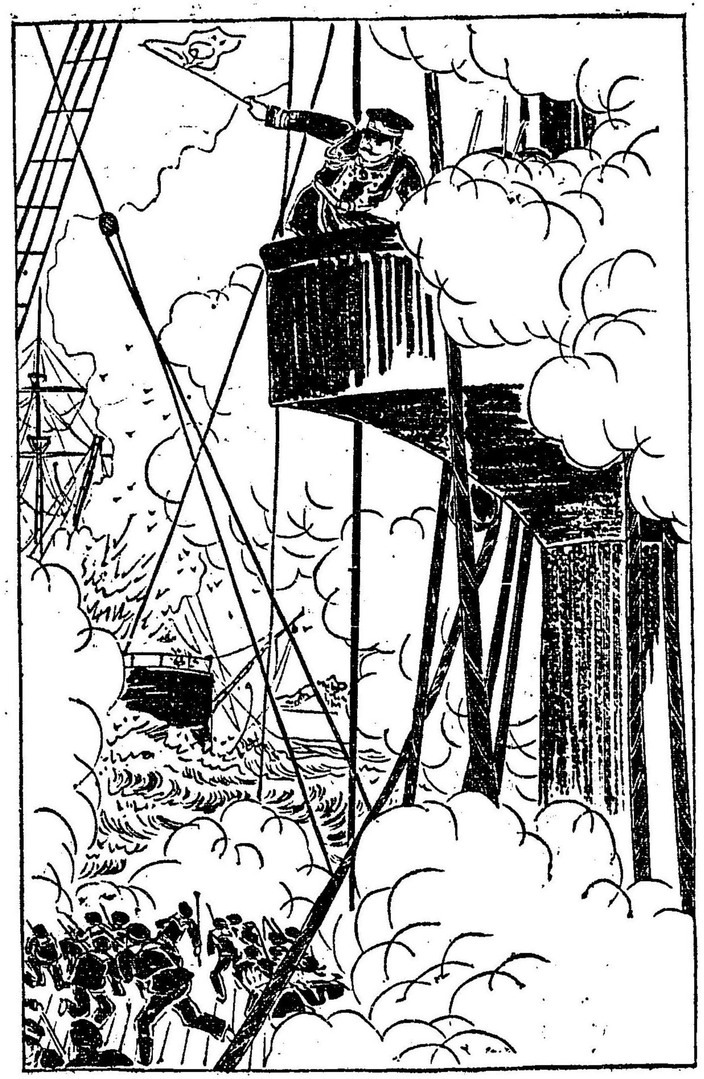
又此の役我軍戰勝の後ち、我軍の分捕品と爲りたるものn金銀塊を滿したる函、四十個、其量各々三十五貫、及び韓錢六萬七千貫の外、兵器彈藥の類、積んで一丘山の如し、實よ快極まるの勝利あり、大日本帝國萬歲、陸軍萬歲

○第七回　太孤山港沖の海戰　大日本艦隊の大捷

嚮きよn豐島近海の海戰先づ其戰端を開きて、而して後ち直ちよ成歡牙山の陸戰之れよ次いで起り、今回n平壤の陸戰先づ開かれて、而して後ち直ちよ太孤山港沖の海戰起れり、此の如くよして常よ其期を一よして發す、亦奇と謂ふ可し、

抑も太孤山港沖と云へるn、旅順口の東、鴨綠江の西、黃海の最北部よ位ぬす、時n是れ九月十七日午前十一時、日清兩艦隊、偶々太孤山港沖よ於て出會せり、是れ我が艦隊n、平壤占領の後ち、陸軍應援の爲め、敵艦を遮斷せんとて、大同江を發して、海洋島よ赴けるよ、此時偶々清國艦隊n、一萬餘の陸兵を搭載護衛して、以て渤海灣より鴨綠江よ輸送し、歸途此よ出會したるものあり、但し此時我が艦隊n、都て、十一隻よして、外よ西京丸一隻を以て組織す、


赤城艦
大孤山沖ニ
激戦ナル圖



即ち其細別は、第一遊撃隊、吉野、高千穂、秋津洲、浪速、及び本隊、松島、千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑、又後備、赤城、西京の十二隻あり、偖て又清國艦隊は、軍艦十四隻、及び水雷艇六隻、都て二十隻を以て組成す、即ち其艦號は、定遠、鎮遠、經遠、其遠、致遠、靖遠、濟遠、平遠、超勇、揚威、威遠、廣甲、廣丙、外に一艦及び水雷艇六隻あり、然らば其艦隊數の上に於て、彼れは既に我れに越ゆる數倍の多きを有す、且つ夫れ彼れ清國艦隊の噸數は、其艦隊の數に比して、更らに一層の多き割合を有す、去れば彼我若し同一の力あらんには、彼が固より勝利を制す可きの數あり、然り而して其戰況勝敗果して如何、乞ふ左の文字は口ありて之を語らんとす、

日清兩艦隊の出會するや、彼我俱に横に其隊列を整ふ、然るに清艦隊は恐怖神の誘ふ所、未だ充分砲丸の達せざる、七八千メートルの距離よりして既に發砲を始むるも、我艦隊は寂然として應

ぜず、既にして彼我兩艦隊漸く接近して、三千メートルの距離となるや、我が隊艦俄然として之れに應戰を始めたり、時已に午前十二時を過ぎけるが、當日風靜かにして、平波洋々、海面恰も一大鏡の如くありしに、數百千の雷霆轟き、黑烟天を蔽ひ、波濤は軍艦の繰縱に激して半空に舞揚りて球を飛す、實に世界開闢以來、未曾有なる新式軍艦の激戰なり、

斯くて砲戰數刻の後ち、敵の艦隊中、超勇、揚威火災を起し、敵の艦隊漸く隊列を亂して崩れ、既にして超勇は、先づ我が砲擊の爲め沈沒する所と爲る、此時敵艦揚威は、狼狽して遁れけるが、周章の餘り、淺瀨に乘揚げて、彼れが本艦隊に遮蔽せらるゝに至れり、既にして午後一時西京丸より、比叡、赤城危險ありとの信號を爲しければ、吉野等は全速力にて應援に赴きしに、時に敵の艦隊は廻轉して以て其全力を、我が本隊に注ぐに至れり、是に於て伊東聯

合艦隊司令長官ハ、樺島を旗艦として、以て之れを居り、比叡、赤城ヨ向て隊外ヨ去れとの信號を發したるヨ、此時しも比叡ハ、偶々火災ヨ罹りけれバ、疾く列外ヨ退きて、以て鎮火ヨ務め、赤城亦之れヨ助力して、以て漸く之を消し留むるヨ至れり、斯くて彼我艦隊の戰鬪ハ、正さヨ激烈の極ヨ達し、西京丸ハ機關の要部を傷けられる、此時敵の艦隊ハ、我が赤城と西京とを目的ヨ、頻りヨ砲擊しけるが、特ヨ鎮遠、定遠の二隻ハ、西京の正面近く進み來れり、去れバ西京丸ハ、此上ハとて最早直進して、以て其中間を突拔るより、亦他策あきヨ至り、時ヨ西京丸ヨハ、猛氣天を衝ける、樺山中將の在る有りて以て指揮することあれバ、意を決して敵艦、鎮遠、定遠の中間ヨ向て突進したるヨ、彼れハ是れ必ず衝突し來るものゝらんと誤認し、流石鋼鐵の堅艦も、我が猛然の勇氣ヨ辟易して、兩艦躍と開きけれバ、西京何あく其間を突き拔けたり、此時敵艦ハ三

たびまで水雷を發射せるが西京ハ巧みヨ乘り拔けて難おきことを得たるハ大幸と謂ふ可し、去るヨても樺山中將の猛氣ハ驚くヨ堪へたり、

此の瞬間前後ヨ、敵艦致遠ハ沈沒したり、此時我が吉野ハ、他の遊擊隊と俱ヨ進んで敵艦近く逼りけれバ、敵の四艦ハ、隙を窺ひ陸地ヨ向て遁走せり、我が遊擊隊ハ、遁さじと只管之を追擊せしヨ、我が本隊ハ亦敵艦定遠鎮遠を取圍まんとして進むヨ、彼の二艦ハ頻りヨ逃路を求むるもの丶如くありしが、時ヨ定遠ハ火災起り、顔ふる動搖するもの丶如くあり、此時稍きヨ陸地ヨ向て追擊せる吉野ハ、敵艦中來遠ありしを以て、之を擊沒めんとて、疾く走りて彼れより前ヨ出で、彼れ之を沖合ヨ追出して、遂ヨ之を擊沒めたり、其沈沒の有樣を見るヨ、先づ艦部より沈み始め、既ヨして艦體の半バまで沈沒するや、舳部ハ直立して天ヨ朝し、見る〳〵

海底ゑ沒入し、跡ゑゝ海波渦を捲きて、清兵の浮沈號叫する聲ゝ、遙かゑ我が軍艦ゑ聞えたり、時ゑ午後五時三十分おゝり、

我が松島ゝ旗艦の事とて、最も敵艦の注目を惹き多く打擊を受け、聊か苦戰の模樣おりしが、此時しも我が八重山艦ゝ、遠く此の戰報を得て、全速力ゑて飛ぶが如くゑ馳せ來り、松島退き代りて其位地ゑ着き、新手の鋭氣を以て、頻りゑ砲擊す、此時伊藤聯合司令長官ゝ、橋立ゑ移りて之を旗艦とす我が艦隊ゝ八重山の新手を得たるゑ、清艦ゝ既ゑ沈沒するもの、數隻の多きゑ及びたれば、此ゑ戰況ゝ、格段の相違を呈し、彼れ清國の殘艦ゝ、皆おゝ渤海灣指して敗走せり、我が艦隊之を追擊したるが、此時日既ゑ傾きければ、遺憾おがらゑ舊戰場に引返し、清艦揚威の追擊せられて、既ゑ人おきものを見、魚形水雷を放ちて之を擊沈せり、此の役終局、我が艦隊の大勝利ゑ歸し、清艦の沈沒せしもの、致遠

來遠超勇、揚威の四艦ゑして、彼れ其燒棄したるもの、定遠、經遠、平遠の三艦おりと云ふ蓋し殘餘の七艦も、亦定めて大打擊を受けたることなん、噫彼れが北洋の精銳略ぼ此ゑ盡く、亦悄然の狀態と謂ふ可し、清艦の死傷未だ詳かおらずと雖ども、北洋艦隊總督丁汝昌ゝ憤かゑ戰死し、其餘將校の死傷數十、水夫下士卒の死傷千を下らざるべし、我が艦隊ゑ於てゝ、損傷を受けたるもの、松島、比叡、赤城、西京の四艦とす、然れども多少の修繕以て、獻ち黃海ゑ向ふを得可し、敵の沈沒廢艦と、固より日を同うして語る可らざるものあり、但し我が海軍の死傷ゝ、赤城艦長坂元少佐以下、將校の戰死九名、下士以下の戰死六十名、負傷者ゝ、將校四名、下士卒九十九名おゝり、

斯の如くゑして平壤、及び黃海、陸海俱ゑ又我軍の大捷ゑ歸す、大日本皇帝陛下萬歲、大日本帝國萬歲、大日本陸海軍萬歲、四千萬の

兼民、宜しく當さに右三呼の萬歲を唱ふべし、因て本書亦其平壤及び黃海、陸海大捷の詳細、當さに日を期して之れが編を續ぐべしと雖ども、今や此の大勝報を得て、寸時も延す可らざるの時あるを以て、此に暫らく此の大捷の略記を揭げて、以て讀者の一覽に供すと云爾、

檢本日清戰鬪實記終

明治廿七年十月十日　增補再版印刷　全月廿四日發行

日清戰鬪實記
版權所有

編輯兼發行者　日本橋區通三丁目十三番地　三井新治郎
印刷者　日本橋區新和泉町一番地　瀧川三代太郎
發兌　日本橋區通三丁目十三番地　金櫻堂
印刷所　日本橋區新和泉町一番地　今古堂活版所

繪本日清戰鬪實記

定價十二錢
郵稅四錢

本書ハ黃海海戰ノ內亂ヨリ牙山大勝利ニ至ルマデノ事實ヲ丁寧ニ戰況ヲ詳シ加フルニ卷中左ノ五個所ニ繪畫ヲ挿入シタル實錄風ノ書

木村信卿著
金子秋江畫

日清韓三國圖

（彩色刷　長一尺五寸　横二尺）
實價壹圓　郵稅二錢

圖ハ木村信卿氏ガ多年ノ刻苦經營シタル中外輿地圖ヲ縮寫トシ尚ホ今ノ實況ニ係ル地名ヲ補訂シ且清國北京及朝鮮ノ要圖ヲ挿入シタル大圖ナリ

木村信卿著

日清韓三國地圖

懸ケグローブ用紙ノ子
彩色刷　長一尺九寸　横二尺八寸
實價四十五錢　郵稅四錢

本圖ハ元陸軍少佐ニ職ヲ奉ジ樞密顧問長ヲヨリ木村信卿氏ガ多年ノ刻苦經營シタル者ニシテ加ルニ國版彫刻ハ有名ナル緒方正明氏ヲシテハ適成ヲ主トシ發刊セル圖ハ杜撰ノ地圖ハ同日ノ論ニ非サルハ一見地圖ヲ見テ知ルベシ

神戸
義兵

支那征討實錄

（東京日々新聞記者　宮崎北亭君編）

本書ハ紙多ノ如ク今ヤ經驗ソノ大成ヲ遂ケ清國戰ノ始末ヲ記載セシニ外ナラズト雖モ新聞紙ニ掲載セラレタル事項ヲ摘錄シタル如キ陳腐ナル發揮ニ有ラズ正確ナル材料ニシテ世ニ現ハレザル事實ニ有ラズ人ニシテ戰況ヲ目擊シタル者ニ付テ充分問ヒタル事項ヲ掲載シタル者ナレバ一種非凡ノ報道ヲ以テ卷中ニ溢ル

成歡大激戰の圖

定價六錢　郵稅二錢

牙山襲擊我軍大勝の圖

定價六錢　郵稅二錢

右両圖ハ事實ニ忠實ニ戰況ヲ寫シ出シタル者ナレバ一見直チニ戰況ヲ見ルニ異ナル事ナシ

發行所　東京日本橋通り三丁目　金櫻堂